

令ヲ發シ更ニ一年間前年ノ租稅ヲ賦課徵收セシム其ノ勅令中ニハ本條ニ基キテ特ニ課稅スル旨ヲ記載スヘシ但シ其ノ勅令ヲ以テ前年ノ租稅ヲ課スルハ一年間ニ止マルコト依リ國王ハ其ノ一年間ノ經過六ヶ月前ニ臨時國會ヲ召集スヘシ其ノ他本條ニ關シテ原案ノ否決ハ各院ニ於テ列席議員三分ノ二以上同意スルニ非サレハ効力ヲキモノトス。

ハノイフル憲法第九十一條第三項ニ曰

聯邦法又ハ國法又ハ私法ニ基キ政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ國會ニ於テ否決スヘカラス。

サクセン、マインケン憲法第八十一條第三項ニ曰

聯邦法律上ノ義務履行ニ必要ナル費額ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス。

○會計法補則ノ効力 廿三年八月四日ノ會計法補則ハ名ハ會計法ノ

補則タリトモ憲法第六十七條ニ大關係アルモノタルコト明ナリ。其ノ然ル所以ノ者ハ大權ニ基ケル歲出、法律ノ結果ニ由ル歲出、及法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ト云フハ孰レモ概括ノ語ニシテ、其ノ各種ノ包容スル細目ニ至リテハ憲法ハ之ヲ列舉セス、從テ例ヘハ既定歲出ニ屬スル者ト之ニ屬セサル者トノ區別ハ法章ニ於テ依ル所アルニ非スシテ之ヲ政府ト議會トノ政事上ノ關係ニ依リ自然ニ定マル所ニ任シタルニ、會計法補則ニ至リ始メテ細目ニ至ルマテモ法律ニ於テ之ヲ指定スルコト、成リタルニ因ル。蓋シ法律ノ結果ニ由ル歲出及法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ事實ニ於テ其ノ細目分明ナリ、唯タ前ニ議會ノ開設ナキ第二十四年度ニ於テ分明ナラサルノミ、然ルコト大權ニ基ケル歲出ニ至リテハ細目分明ナラス大權ニ基ク費用ト普通行政ノ爲ニスル費用トノ間ニ井然タル分界ヲ設クルコト殆ト難シ、然ルニ會計

法補則第一條ハ廿四年度ニ於テ大權ニ基ケル費目ヲ斷然列舉シタリ。蓋憲法ニ於テ何々ヲ大權上ノ歳出トスルヤニ就キ明文ナキニ於テハ國家ノ諸ノ機關ノ合意ヲ以テ之ヲ決定スルノ外ナシ然ルニ議會ニ對スル豫算上ノ標準ヲ定メンカ爲ニ議會未存ノ時ニ於テ之ヲ指定スルニ當テハ異論ノ根底ヲ遺サ、ルニ非サル歟。就中各廳ノ廳費及經常修繕費ニ至リテハ之ヲ大權上ノ費用トシテ得ズ、其ハ中ニハ法律ノ結果タル事務ヲ行フノ費用モ有ルヘシ或ハ法律ニモ依ラス大臣以下ノ命令ヲ執行スルノ費用モアルヘシ。若他日廳費ノ全部若ハ一部ニシテ大權上ノ費用ニ非スト看做スヲ一定センカ會計法補助第一條ヲ改正セサルヲ得ス是レ即チ法律改正ノ手續ヲ以テ天皇大權ノ境域ヲ増減セシムルノ逆順ニ屬ス。

又會計法補則ニシテ若廿四年度ニ關シ異議ナク經過シタリトスレバ

茲ニ憲法上最モ注意スヘキ一事アリ即チ廿四年度ニ於テ是定歳出タリシ者ハ廿五年度ニ對シテモ既定歳出トナリ廿五年度ニ於テ既定歳出タリシ者ハ廿六年度ニ對シテモ既定歳出トナリテ永久ニ及フカ故ニ會計法補則ハ陽ハ議會未存ノ時ヨリ既存ノ時ニ移ル中間ノ關係ヲ定ムルニ過キストイヘモ其ノ効力ハ永遠ニ及ヒテ恰モ憲法ノ追加ニ異ナラサルコト是レナリ。蓋會計法補則ハ其ノ形式ニ於テハ一ノ法律ナレハ他日廢止ノ必要ヲ見レバ尋常法律廢止ノ手續ニ依ルコトヲ得ヘシ然レモ之ヲ廢止シタレハトテモ既ニ二十四年度ノ豫算ニ於テ既定歳出トシタルモノハ其ノ同補則ニ依ルト否トヲ問ハス永ク將來ニ向テ既定ノ歳出ナリ、何トナレハ既定ト云フニハ一度議會ノ協賛ヲ經テ經常費ト成リタルモノト云フノ外ニ意義アラサレハナリ。

又會計法補則ニ依ルト否トヲ問ハス例ヘハ今年ノ議會ニ於テ大權ニ

基クノ歳出ナリト断定シテ其ノ費目ニ協賛シタルモノニ就キ次年ノ
 議會ハ是レ大權ニ基クノ歳出ニ非スト断定スルコトヲ得ルヤ否ヤト
 云フニ至リテハ是レ一ノ憲法問題ナリ而シテ我カ憲法ニ於テハ帝國
 議會ヲ以テ永久ニ繼續スルモノト看做スカ故ニ中途ニ於テ前日ノ議
 ヲ改ムヘキ特別ノ事情ノ生シタル場合ノ外ハ一旦大權ニ基クノ歳出
 ト認メタル者ハ永ク之ヲ同種ノ歳出ト認ムルノ義務アリ。
 政府ハ同意ハ如何シテ之ヲ表スルヤト云フニ至テハ憲法法律ニ一定
 ノ法式ヲ掲ケタルニ非サレハ是レ又時ノ便宜ニ從フヘキモノトス、即
 チ議會ヨリ減廢ノ建議ヲナシ政府之ニ同意スルモ一ノ法ナリ、内閣總
 理大臣又ハ政府全体ヲ代表スル委員ニ於テ議會兩院ノ議決セル減廢
 ノ案ニ同意スル旨ヲ議會ニ向テ宣言スルモ一ノ法ナリ。若政府ノ同
 意セサルニモ拘ハラス尙ホ議會ニ於テ減廢ノ修正ヲ爲シタリトセン

乎其ノ豫算ハ成立ニ至ラサルモノト看做スノ外無シ。

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ハ年限ヲ定メ繼
 續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルコトヲ得。

是レ又年々豫算議決ノ制ニ對スル一ノ變例ナリ。即チ豫算ハ一年ノ
 歳出歳入ヲ確定スル者ニシテ翌年以後ノ事ニハ關係セス然レモ事業
 ノ種類ニ依リテハ永久ニ非ス、從テ永久歳出ノ款項ニ加フ可カラサル
 モ尙ホ且ツ一年ニシテ止マス、五年乃至十年ノ間ハ毎年若干ノ支出ヲ
 要スルコトアリ、例ハ建築工事ノ如キ是レナリ。此ノ場合ニ於テ若
 シ初メ一年ノ支出ノミ協賛ヲ經テ其ノ事業ニ取係リ明年ニ入り議院
 ノ更ニ協賛セサルニ會フハ其ノ爲ニ事業ヲ中止スルノ止ムヲ得ザ
 ルニ至ルヘシ、故ニ此ノ如キ特別ノ須要アルトキハ政府ヲシテ一度ニ
 シテ數年ニ涉レル協賛ヲ得、第二年以後ハ繼續費トシテ協賛ヲ要セス

ノ支出スルコトヲ得シムルノ同意ナリ。巴威里ニ於テノ如ク一旦議定シタル豫算ハ六年間之ヲ改メス、或ハ二年間之ヲ改議セサルノ國ニ於テハ本條ノ如キ程規ナキモ繼續ノ事業ヲ行フニ不便ナカルヘシ、然レモ毎年改議ノ法ヲ取ルニ於テ本條無キモハ例ヘハ向後三年ニ涉リ漸次支出スヘキ費目ニ對シ現在ノ一年ニ於テ其ノ全額ヲ備ヘサル可カラサルノ不利ヲ生スヘシ。

此ノ一條ニ依リ協賛ヲ求ムルノ條件ハ二ナリ、曰特別ノ須要アル事、曰年限ヲ定ムル事是レナリ、而シテ繼續費ノ全額ハ之ヲ其ノ數年ニ均分ス、年次支出スル所ノ額ヲ異ニスルモ敢テ憲法ノ禁セサル所ナリ。又會計法第二十二條ニ曰

「數年ヲ期シテ埃功スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ繼續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ毎年度ノ仕拂殘額ヲ埃功年度マテ遞次

六十八

六十九

繰越使用スルコトヲ得
トアリテ同法ノ第廿條ニ規定シタル一年ノ剩餘ハ之ヲ翌年ノ豫算ニ繰込ムヘシトスル一般ノ原則ニ對シ、變則ヲ設ケタリ。

本條ニ關シテモ第六十七條ニ於テノ如ク帝國議會開設前ヨリ開設後ニ及フ中間ノ關係ニ就キ疑問ヲ存シタリ。蓋本條ニ依ルトキハ繼續費ハ一旦議會ノ協賛ヲ經タルモノナラサルヲ得ス、而シテ明治二十三年ニ於テハ未ダ議會アラサルカ故ニ明治二十四年度ニ於テハ繼續費アルヲ得ス、然ルニ實際ニ於テハ數年ヲ期シタル行政ノ事業數多アリ、依テ其ノ處分ヲ如何スヘキト云フ是レナリ。嚴密ニ本條ヲ解セントスルハ現在政府カ數年ヲ期シテ着次シタル事業ヲ舉ゲテ議會協賛權ノ下ニ置キ、若協賛セサルトキハ則チ中止スルノ關係ニ立タシメサルヲ得サルヘシ、然レモ是レ實際ニ於テ難キ事タルノミナラス、憲法ノ

主意ハ議會未存ヨリ既存ニ移ルノ時ヲ以テ公權ノ作用ノ途轍ヲ全ク一變スルニ在ルニ非ス、議會既存ノ後ニ於テ議會ニ屬スルノ權ハ其ノ未存ノ時ニ於テ政府ニ屬シ政府カ此ノ權ヲ以テ一旦繼續費ト定メタルモノハ其ノ事業結了ノ時ニ至ルマテ繼續費タルノ効力ヲ保有スヘキコト猶ホ議會以前ニ制定シタル法律ノ議會以後ニ於テモ効力ヲ保有スルカ如シ。此ノ兩議ノ間ニ斯ク抵觸スル所アルヲ調和センカ爲ニ會計法補則ノ第四條ニ左ノ如ク規程シタリ、曰、

〔明治廿三年度以前ノ歲出豫算ニ於テ數年ヲ期シタル事業ニシテ明治廿四年度ニ至ルマテ未タ竣工ニ至ラサルモノハ繼續費ノ例ニ依ル〕

是ニ於テ廿三年度以前ニ始マリテ廿四年度以後ニ涉レル繼續費ハ憲法ノ認メテ以テ繼續費ト爲ス所ノモノトハ相同シカラスト雖尙ホ右

第四條ノ効力ニ因リ所謂法律ノ結果ニ由ルノ歲出ト爲リ、憲法第六十七條ニ依リ政府ノ同意ヲ經ルニ非サレハ廢除削減シ難キ所ト爲レリ。

第六十九條 避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ豫備費ヲ設クヘシ。

本條及次條ハ豫算ヲ議定スルニ當リ豫知ス可カラサリシ歲出アル場合ニ於テ之ニ應スルノ道ヲ設クルモノニシテ本條ハ行政ノ常經ニ於テ不足ヲ生シタル場合ニ對シ、次條國家ノ事變ニ於テ臨時收入ヲ要スル場合ニ對ス。

第六十四條ニ於テハ豫算超過及豫算外支出ヲ爲スヲ禁セス唯其ノ議會ノ事後承認ヲ要スルコトヲ述ヘタリ、而シテ其ノ財源ハ即テ之ヲ本條ノ豫備金ニ資ラシムルノ計畫ナリ。

憲法既ニ豫備費ヲ設クヘシト云ヘルトキハ必ス年々ノ豫算ニ其ノ一
款ヲ設クルノ義務アリ、其ノ設ナキハ憲法違反ニ屬ス、且其ノ額ノ如キ
モ其ノ目的ニ相應セサル可カラス。本邦ニ於テハ他國ニ於テノ如ク
法律ヲ以テ其ノ額ヲ指定セスト雖、亦年々ノ經驗ニ依リ大略ハ定メ得
ヘキナルヘシ。

○避クヘカラサル豫算ノ不足ト云フトキハ必要費額ノ豫算案編成ノ
時ニ於テ豫期セサリシ分ヲ云フ、故ニ既ニ豫期シテ豫算案ニ載セタル
モ議會ノ理由ヲ付シテ減削スル所ト爲リタル部分ニハ對セサルヲ通
例トス、但シ議會ノ理由ニ反對シテ之ヲ破ルニ足ル事情ノ果シテ起リ
タル場合ハ此ノ限ニ非ス。

○豫算外ニ生シタル必要ノ費目ト云フモ亦豫算案編成ノ時ニ於テ豫
知セサリシモノヲ云ヒ豫知シ得テ豫算案ニハ掲ケタルモ議會ノ廢除

七十二

七十三

スル所ト爲リタル者ニ適用セサルヲ例トス。又不利ヲ來タサスシテ
次年度迄延引スルヲ得ヘキモノモ必要ノ費目ニ非ス。又單ニ利益ノ
ミヲ目的トスル者モ必要費目ニ非ス。

會計法第七條ニ依レハ豫備金ニ二種アリ左ノ如シ。

第一豫備金

第二豫備金

第一豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス

第二豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費目ニ充ツルモノトス

同法第九條ニ依レハ豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝室
議會ノ承諾ヲ要ス。サクセン憲法第百〇六條ニ豫備金ノ事ヲ規定シ、
英ニモツレジュリー、チュスト、フアント備金ナル者アリ。伊國千八百八十四
年二月十七日ノ法律ハ日本ト同一ノ二分法ヲ採レリ。

第七十條 公共ノ安寧ヲ保持スル爲緊要ノ需用アル
場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集
スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處
分ヲナスコトヲ得。

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出
シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

此ノ條ハ第一章ノ第八條ヲ會計ノ場合ニ應用シタルモノニシテ、其ノ
要ハ憲法及法律上一定ノ規定アリテ、尋常ノ場合ニハ動かス可ラスト
雖、強テ之ヲ保持セントセハ却テ國家ヲ危ウスルノ恐アルルルノ處分ヲ
勅令權ニ屬セシメタルモノナリ。即チ其ノ主トシテ關スル所ハ新稅
ヲ課シ、及稅率ヲ變更スルハ法律ニ依ルヲ要シ、國債ヲ起シ、國庫ノ負擔
ト成ルヘキ契約ニシテ豫算ニ定メサル者ヲ爲スハ議會ノ協贊ヲ經ル

ヲ要ストスル第六十二條ノ規定ヲ一時中止シ、緊急ニ臨ミ法律ニ依ラ
ス、國會ノ協贊ヲ經スシテ、此等ノ處分ヲ爲スノ權ヲ元首ニ委任シタル
モノナリ。然レモ財政ノ事ハ、特ニ臣民ノ所有權ニ重大ノ關係ヲ有ス
ルモノナルカ故ニ、殊サラ内外ノ情形ニ因リ、政府ハ帝國議會ヲ召集ス
ルコト能ハサルトキ、下云フ節文ヲ付シ以テ苟モ事ノ急迫此ノ如クナル
場合ヲ除クノ外ハ必ス第四十三條ニ依リ臨時會議ヲ開クノ義務ヲ國
務大臣ニ負ハシタルモノナリ。

臨時財政上ノ處分ニ係ル勅令一旦出ツルニ及テ次ノ議會ニ提出シ其
ノ承諾ヲ求メントスルトキハ國務各大臣連帶シテ左ノ諸点ヲ辨明セ
サル可カラス。曰第一ニ其ノ事ノ緊要ナルカ爲ニ帝國議會ヲ召集ス
ルニ違ナカリシテ、曰第二ニ其ノ處分ヲ爲スニ非サリセハ國家危難
陷ル可カリシテ是レナリ。内外ノ事情ニ依リ云云トアルニテモ知ル

可キ如ク是レ多ク戦争ノ場合ニ於テ用フヘキ條ナルコト明ナリ。今外國ノ憲法ニ於テ戦争ノ急ニ處スル爲ニ設ケタル條項ヲ見ルニ索撤憲法第百五條第八節ニ曰、

「議會ノ承認ヲ經ルニ非サレハ有効ニ國債ヲ募集スルヲ得ス、議會ノ承認ヲ要スルモ非常ノ緊急豫期ス可カラサル場合ニ於テ迅速ナル財政上ノ處分ヲ要スルトキハ臨時議會ヲ召集スヘシ。

然レモ狀況ニ依リ到底遲延ナク議員ヲ召集スルコト能ハサルカ又ハ議員參會スル能ハサルトキ國王ハ其ノ事ヲ上奏シタル各省大臣ノ責任ヲ以テ非常ノ需用ニ充タス爲ニ缺ク可カラサル臨時ノ處分ヲ命スルコトヲ得、又必要ノ場合ニ於テハ特ニ國債ヲ募集スルコトヲ得ルモ成ル可ク速ニ且晚クトモ次會ノ通常會議ニ其ノ處分ヲ提出シテ憲法上ノ承認ヲ受ケ、又其ノ必要ナリシ金額ノ支用ヲ證明ス

七十六

七十七

又巴威里憲法第七章第十五條ニ曰、

外部ノ危難ニ迫ル緊急ノ場合ニ於テ資金ノ收用ヲ要スルモ外部ノ狀況ニ由リ議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ常置委員ハ議會ノ名義ヲ以テ臨時國債募集ノ承認ヲ與フルノ權ヲ有ス。(但シ常置委員ハ憲法第七章第十四條ニ依リ國債償却ノ爲各院ヨリ委員一名ヲ撰定シタルモノ是レナリ)。

議會ヲ召集スルコトヲ得ヘキ場合ニ至レハ直ニ募債ニ係ル一切ノ評議ヲ報告シ以テ國債臺帳ニ記入スヘシ。

ブラウンシワイヒ憲法第百九十條ニ曰

非常ノ事變ニ際シ遲延ナク議會ヲ召集スルコトヲ得ス、又ハ危難切迫ナルニ際シ通常ノ認承及資金ニシテ國家ノ目的ヲ達シ及國家ノ

安寧ヲ保持スルニ足ラサルトキハ常置委員ノ認承ヲ以テ左ノ諸事ヲ爲スコトヲ得ヘシ。

一 租税ヲ増額シ及新税ヲ課スルコト、但シ六ヶ月以上ニ及フコトヲ得ス。

一 國債ヲ起シ十萬ターレルヲ制限トシテ之ヲ募集スルコト。政府カ此ノ如キ協議ヲ以テ爲シタル一切ノ處分并ニ其ノ理由ハ成ル可ク速ニ之ヲ議會ニ提出スヘシ。

議會ニシテ之ニ對シ認承ヲ拒否スルトキハ租税ニ關ル協議ハ其ノ時ヨリ効力ヲ失フヘシ。本條ニ依リ爲シタル國債ハ尙ホ有効ナルヘシ、然レモ上示ノ募集額限ニ達シタルトキハ議會召集ニ入ルマテ更ニ募集スルコトヲ得ス。

議會ヲ召集スルコト熊ハサルト否ト及危難切迫スルト否トニ就キ

七十九

七十九

キテハ政府之ヲ決スルニシテ然レモ表決權ヲ有スル内閣ノ各員ハ之ニ對シ其ノ責ニ任スヘク、從テ之ニ關シ爲ス一切ノ處分ニ副署スヘシ。又バーデン憲法第六十三條ニ曰、

「開戦準備ノ時ニ於テ又ハ交戦ノ間ニ於テ聯邦ノ(兵備規約ヨリ起ル)義務ヲ迅速ニ且有効ニ履行センカ爲ニハ大公ハ議會ノ認承ニ付セサルモ尙ホ國債ヲ起シ及戦税ヲ課スルコトヲ得。此ノ場合ニ於テ議會ハ下示ノ如キ監督及行政協賛ノ權ヲ行フ。

一直ニ委員ヲ召集シテ其ノ中ヨリ大藏省及兵部省ニ各二名ヲ派遣シ又監督員一名ヲ軍用金庫ニ派遣シ、以テ軍用ノ爲ニ募集シタル金圓ハ果シテ信ニ此ノ目的ノ爲ニ支出セラル、ヤチ監視セシム。

一 兵戦ニ關ル各種ノ委員ヲ設置スル毎ニ大公ノ指定アル員數ノ委

員ヲ派出シテ之ニ加ハラシメ、又地方廳ニ此ノ委員ヲ置ク場合ニ於テハ同地方内ニ居住スル議會議員ヲシテ之ニ加ハラシム。

普魯西ニ於テハ緊急命令ニ係ル憲法第六十三條アルモ會計ニ關シテハ一切臨時ノ處分ヲ許サス、必ス議會ヲ臨時召集シテ其ノ承認ヲ求ムルヲ必要トスルコト各憲法學者ノ同意スル所タルノミナラス、又普魯西政府ノ常ニ認ムル所ニシテ彼ノ有名ナル憲法爭議ノ如キモ憲法ニ臨時處分ノ路ヲ設ケサリシヨリ起レルモノナリ。

由之觀是各國ノ憲法ニ(一)必ス臨時召集ヲ必要トスルモノ(二)常置委員ヲ置テ其ノ同意ヲ必要トスルモノ、及(三)政府ノ獨權ヲ以テ臨時必要ノ處分ヲ爲シ事後承認ヲ得シムルモノ、三別アリテ而シテ我カ憲法ハ其ノ第三ヲ採リ、是レ政府ニ權力ヲ歸スル最モ大ナルノ一法ナリ。次ニ其ノ處分ノ種類ニ至リテモ亦各國ノ規程種々ナリ、左ノ如シ。

(一)準備資金ヲ置キ緊急ノ場合ハ一定ノ條件ニ從ヒ政府之ヲ使用スルヲ許スコト、是レ瑞典ノ取ル所ニシテ近年普魯西モ亦佛國ヨリ得タル債金ノ一部ヲ以テ之ニ備ヘタリ。(二)新稅又ハ增稅ヲ許スコト。(三)國債ヲ募集スキコト。(四)別ニ處分ノ体裁ヲ指定セサルコト。各國中第二第三ヲ許シテ多少ノ制限ヲ置クモノ最モ多ク、本邦ノ如ク處分ノ種類ヲ指定セサルモノハ最モ少ナシ。然レ此以上ノ外ニ國債ノ一種ヲレモ現金募集トハ大ニ趣ヲ異ニスル紙幣發行ノ一法アリテ學者ノ之ヲ主張スル者多ク又スタインハ大藏省證券發行額ニ係ル規程ノ効力ヲ中止シテ多額ヲ發行シ議會ノ事後承認ヲ經タルキハ之ヲ通常國債ニ引直スヲ良策トスト言ヘリ。○承諾ヲ求ムルヲ要スト云フニ就キテハ如何ナル場合ニ於テハ承諾ヲ得サルヤ及若承諾ヲ得サレハ其ノ結果如何ト云フヲ講究スルコト

甚々必要ナリ憲法義解ニ曰、

「臨時財政ノ處分ニシテ將來ニ國庫ノ爲ニ義務ヲ生スル者若議會ノ事後承諾ヲ得サルトキハ何等ノ結果ヲ生スヘキ乎蓋議會ノ承諾ヲ拒ムハ將來ニ繼行スルノ効力ヲ拒ム者ニシテ其ノ既ニ行ヘル過去ノ處分ヲ追廢スルニ非ス第八條ノ說明既故ニ勅令ニ依リ既ニ生シタル政府ノ義務ハ議會之ヲ廢スルコト能ハス抑事若此ニ至ラハ國家不詳ノ結果トシテ視サルコトヲ得ス此レ本條ノ國家ノ成立ヲ保護スル爲ニ至テ己ヲ得サルノ處分ヲ認メ又議會ノ權ヲ存崇シテ尤慎重ノ意ヲ致ス所以ナリ」
是レ甚々簡短ナリ然レモ之ヲ密ニ分析スルトキハ錯雜ナル關係ヲ生スヘシ而シテ是レ皆實際上關要ノ点ニ非サルナシ、請フ之ヲ左ニ畧述セン。

(一)承諾拒否ノ理由 議會ハ何ノ理由ニ因リ其ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ルヤハ是レ一ノ問題ナリ而シテ義解上文ノ意ハ唯々將來ニ繼行スルハ効力ヲ拒ムニ在リト云フモ是レ惟フニ不承諾ノ結果ノ及フ所ヲ云フモノニシテ其ノ理由ヲ云フニ非ス而シテ理由ニ就キテハ第八條ノ緊急勅令ニ關ル注解ニ於テ云フ所ヲ以テ標準トスヘキニ似タリ、即チ之ニ依レハ其ノ憲法違反ナルヤ否、并本條ノ條件ニ合ヘルヤ否及其ノ行政上果シテ正當ナル處分タリヤ否ニモ及フモノトセリ、曰「此ノ勅令處分ノ憲法ニ矛盾シ又ハ本條ニ掲ケタル要件ヲ缺キタルヲ發見シタルトキ又ハ其ノ他ノ立法上ノ意見ニ由リ承諾ヲ拒ムコトヲ得ヘシ」
而シテ第八條ト第七十條トノ間ニ彼レハ緊急勅令タリ是レハ緊急處分タルノ差違アリト雖、勅令ニシテ既ニ憲法ニ違背スルト認ムレハ則チ承諾ヲ拒ムコトヲ得ベクンハ、處分ニ至リテハ背憲ヲ以テ不承諾ノ

理由ト爲スヲ得ヘキコト勿論ナリ、管ニ將來繼行ノ不必要ヲ理由トスルノミニ非ス、而シテ義解モ亦其ノ旨趣ハ此ニ在ルヲ疑フ可カラス。サテ緊急勅令ノ場合ニ於テ憲法ニ矛盾ス可カラストハ例ヘハ法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要セス」ト云フカ如キ緊急勅令ヲ發スルヲ云フナリ。然ルニ此ノ点ヨリ推究スルトキハ此ニ緊要ナル一点ノ存スルハ他無シ帝國憲法第六十二條ニ新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシトアリテ課稅增稅ハ元來財務行政ノ處分ナルニモ拘ラス此ノ處分ハ必ス法律ニ依テスヘキヲ定ムヘキニ今若非常緊急ノ場合ニ於テ法律ニ依テ命令ヲ以テ此ノ處分ヲ爲ストキハ是レ憲法矛盾タルヲ免レサルヘキ事是レナリ。即チ本邦ニ於テ臨時財政處分ノ体裁ヲ指定セサリシハ政府ノ措置ヲ成ル可ク自由ニスルノ意ナルヘカリシモ此ノ点ヨリ見ルトキハ新稅增稅ノ一段ニ至リ

却テ窮屈ニ陥イルモノト謂ハサルヲ得ス。故ニ本邦ニ於テ戰時ノ急迫ニ際シ戰稅ヲ課セントスルカ如キアラハ先ツ憲法第八條ニ依リ緊急課稅ノ勅令ヲ發シ之ニ依リ處分スルノ迂路ヲ取ラサル可カラス。但シ國債及國庫負擔ノ契約ニ至リテハ第六十二條ノ明文ニ於テモ唯「帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ」トアルノミナルカ故ニ直ニ第七十條ニ依リ協賛ヲ待タス先ツ處分スルモ憲法矛盾ニハ非サルナリ。次ニ第八條ノ義解ニ於テ本條ニ掲ケタル要件ト云フニ對スルモノハ本條ニ在テハ第一議會召集ノ遑ナカリシヤ否及緊急需要ノ度果シテ此ノ如キ非常處分ヲ當然スルニ足りシヤ否是レナリ、而シテ是レ事實ノ問題ナレハ法文ヲ以テ限定スルコト能ハサル所ナリ。次ニ其ノ他立法上ノ意見ニ因リ承諾ヲ拒ムト云フニ對スルモノハ本條ニ在テハ例ヘハ政府カ外國債募集ノ處分ニ出テタルハ不都合ナリ

寧口紙幣發行ノ策ニ出ツルニ加カスト云フカ如ク、行政上其ノ處分ノ
体裁ヲ是非スルノ点ヨリ承諾ヲ拒ムノ義ナルヘシ。然レモ元來處分
ヲ定ムルハ政府ノ本職ナレハ此ノ一点ヨリ承諾ヲ拒ムハ殆ト難アル
可キ歟。」

(二)承諾拒否ノ結果 以上三種ノ理由ノ一ニ因リ果シテ承諾ヲ拒ミタ
ルトキハ其ノ結果如何ト云フニ關シテハ先ツ其ノ行政上ノ結果ヲ論
シ第二ニ責任上ノ結果ヲ論セサル可カラズ

第一。政府カ本條ニ依リ爲シタル所ハ之ヲ行政上ノ處分トシテハ十
分ニ有効ナルモノナリトス。此ノ處分ノ以上三種ノ條件ニ合ヘルト
否トハ是レ國法上ノ問題ナリ、而シテ行政上ニ於テハ憲法既ニ緊急需
要アリテ而モ議會ヲ召集スルコトヲ得スト認ムル場合ニ於テ臨時處
分ヲ爲スノ職權ヲ政府ニ屬セシメタルモノナレハ、之ニ依リ政府ノ爲

シタル處分ハ之ヲ正當職權ヨリ出ツルノ處分ナリト看做サルヲ得
ス、而シテ此ノ處分ノ基ツク所ノ職權ニシテ若憲法上ノ規約ニ合セザ
ルモノナランニハ、政府ハ則チ其ノ責ニ任スヘキモ、爲ニ此ノ處分ノ効
力ニ影響スルコト無シ、是レ恰モ命令ノ法律ニ矛盾スルハ責任ノ問題
タルモ、其ノ命令ニシテ消滅ニ至ラサル間ハ之ニ依リ爲シタル所ノ處
分ハ合法命令ニ依リ爲シタル所ノ處分ニ均シク有効ナルカ如シ。
又更ニ他ノ点ヨリ論スレハ處分ハ必ス一方ニ於テ此ノ處分ニ應スル
一個人又ハ法人ノ存スルモノナリ、而シテ財政處分ノ場合ニ在テハ此
ノ一個人又ハ法人ニ對スル關係ハ國庫ニ對スル契約ノ性質ニ出ツル
コト多シ、例ヘハ國債ノ如キ、紙幣發行ノ如キ、大藏省證券發行ノ如キ是
レナリ、若果シテ此ノ性質ニ出ツルトキハ一個人又ハ法人ノ民法上ノ
既得權ニ關係スルヲ以テ、所謂法律ノ結果ニ因ル政府ノ義務ト爲ルニ

因リ之ヲ取消スコト固ヨリ難ク、果シテ取消シタラシユハ一個人又ハ法人ヨリ國庫ヲ被告トシテ出訴スルニ至ルヘシ。故ニ議會ニシテ承諾ヲ拒ムトスルモ、其ノ之ヲ拒ムノ前ニ於テ爲シタル處分ハ皆之ヲ有効ノ處分ナリトセサルヲ得ス、唯タ其ノ後ニ至ルマテモ同シ處分ヲ繼行スルコトヲ得サラシムルノミ。此ノ關係ハ憲法義解既ニ第八條ノ勅令ニ就キ之ヲ明示セルノミナラス又國法學上既ニ一定ノ論ナリ。然レハ議會ガ不承諾ノ旨ヲ政府ニ通知スル前ニ於テ募集シタル國債發行シタル紙幣ノ如キハ皆有効ナルモノトス。然レトモ此ノ通知ニ接スルト同時ニ大藏省ヲシテ此ノ處分ヲ爲サシメタル所以ノ分令ハ之ヲ取消サ、ルヲ得ス但タ是レ官廳ヨリ官廳ニ對シ爲スノ命令ナルヲ以テ第八條緊急勅令ニ於ケルカ如ク必スシモ其ノ取消ヲ公布スルヲ要セサルノミ。

又法理上ノ論ニハ非スト雖政畧上ヨリシテ十分ニ億度スヘキモノアルハ他ナシ、既ニ爲シタル臨時處分ノ効力ニ至ルマテモ果シテ議會ノ承諾如何ニ因リ動クモノナリトスルトキハ例ヘハ公債募集ノ場合ノ如キ、假令元金ノ拂戻ヲ爲ス且之ヲ公債ニ記入シタルノ曉ニ於テ突然解約ト爲ルニ因リ資本主ニ被ル所ノ不利益輕少ナラサルヘキヲ以テ、誰レモ甘シテ此ノ募集ニ應セサルヘシ、然ルトキハ本條ノ如キ規程ヲ設クルノ目的ニ相違スヘキコト是レナリ。然レモ元來會計豫算ノ制度ハ大平無事ノ時ニ於ケル關係ヲ期シテ設ケタル所ナリ、而シテ國家ハ何時事變ノ至ル無キヲ保シ難キモノナレバ、臨時危急ニ應スルノ備ヘモ亦必ス無カル可カラサル所ナリ、即チ本條ノ有ルハ是レカ爲ナルニ、本條ニシテ其ノ十分ノ目的ヲ達スルコ足ラストセバ、別ニ彼ノ急變準備資金ノ如キモノヲ常永設備セサルヲ得ス、是レ財政上最モ不

利トスル所ナルヲ以テ寧ロ臨時ノ處分ニ歸スルニ十分ノ効力ヲ以テシテ而シテ責任ノ一方ヨリ政府ヲ此ノ職權ヲ濫用妄使スルコトヲ扞妨スルノ却テ經濟ニ適シタルニ如カサルナリ。

第三。責任上ノ結果如何ハ上交分解スル三種條件ノ孰レニ違ヒタルヤニ因リ異ナルニシ。 (イ) 若本條ノ處分ニシテ憲法ニ矛盾シタルトキ即チ例ヘハ前述ノ如ク法律ニ依ラス稅率ヲ變更シタルトキ又ハ憲法第廿七條ニ日本臣民ハ所有權ヲ侵サル、コトナシ公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ルトアルニ違背シテ軍用ニ供スル爲強テ一個人又ハ法人ノ資産ヲ收公シ又ハ用金ヲ徵收シタル場合ニ於テハ政府ノ各大臣ニ於テ意法違犯ノ責ニ任セサルヲ得ヌ。或ハ本條ニ帝國議會ニ提出シテ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ストアルニ次ノ會期ニ於テ之ヲ提出セザルトキモ亦憲法違反ノ名ヲ免カレサルヘシ。果シテ憲

法ニ背戻タル場合ニ於テハ其ノ責任ノ結果如何ハ本邦ノ國法ニ於テ未タ一定セサル所ナリ。 (ロ) 次ニ本條ノ條件ニ就キ缺點アル場合例ヘハ臨時召集ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テ之ヲ爲サ、リシトキノ如キニ至テハ、是レ前述ノ如ク政府ノ臨時召集ヲ難シトシタルハ即チ政府ノ意見ニシテ議會ノ臨時召集ノ餘地アリタリトスルモ同シク是レ議會ノ意見ナリ、故ニ其ノ曲直ハ全ク事實ノ問題ニ屬シ法律ノ問題ト爲ルコト無シ、隨テ大臣ノ法律上責任ノ事件トモ成ルコト有ラサルナリ。然レモ其ノ延テ政事上ノ責任ニ關係スルニ至ルハ第一ニ議會ニ提出シタルノ後ニ於テモ尙ホ事變繼續スルカ故ニ同シ處分ヲ經行セサレハ急變ニ應スルコトヲ得スシテ國家危難ニ陥ルヘシト主張シ果シテ繼行スルニ非サレハ責任ヲ以テ行政事務ヲ行ヒ難シト明言シタル場合ニ在リ此ノ場合ニ於テ議會尙ホ同意セザルトキハ終ニ議會ト現内閣

トノ爭議トナリ現内閣ニ於テ辭職スルヤ將テ議會ニ解散ヲ命スルヤ
 ノ一ニ歸着スヘシ是レ時ノ勢ニシテ豫メ規矩法繩ヲ定ムルヲ得サ
 ル所ナリ。又始メ承諾ヲ促スニ當リ萬一承諾ヲ經サレハ責任ヲ以テ
 行政ヲ施シ難シト明言シタル場合ニ於テモ其ノ拒否ニ會ヘハ則チ辭
 職スルノ義務ヲ生スヘシ。
 次ノ會期ニ於テトアルカラニハ仮令事變ノ當時ニ於テハ召集ヲ得
 ノ情形アリタルモ次ノ會期ニ至ル前ニ召集スルコトヲ得ヘキニ至リ
 タレハトテ尙ホ召集ノ義務アルニ非スト看做スヘキナリ。

**第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫
 算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行
 スヘシ**

七十六
七十七

○豫算ヲ議定セストハ議會自ラ議會ノ結局ヲ爲サスシテ閉會ニ至レ
 カラ云フ。例ヘハ兩院ノ協議整ハサル場合、又ハ既定歳出ノ減廢ニ就
 キ政府ノ同意ヲ求ムルニ當リ、政府ノ容易ニ同意セサルヨリ遷延シテ
 閉會ニ至ルノ場合ノ如シ。但シ政府ノ一旦提出シタル所ノ案ハ必ス
 一旦議事ニ付セサルヲ得サルヲ第三十八條ニ述ヘタルカ如シ然レモ
 其ノ決了ニ至リテハ素ヨリ一定ノ日限ヲ付スヘキニ非サルヲ明白ナ
 リ。然ルニ會計年度ノ終始ニハ定限アレハ其ノ始マルノ時ニ至ルノ
 前ニ議了セサレハ、即チ其ノ年ノ豫算ハ議會ヲ經由セサルモノト看做
 サ、ルヲ得ス、是レ各國ノ制ナリ、故ニ此ノ場合ニハ止ムヲ得ス前年度
 ノ分ヲ施行スルナリ。

○豫算成立ニ至ラスト云フニ二ノ場合アリ、左ノ如シ、

(一)兩議院ノ一ニ於テ豫算ヲ廢棄シタルトキ

(二)議會未タ豫算ヲ議決セスシテ停會又ハ解散ヲ命セラレタルトキ

但シ停會又ハ解散ノ後再ヒ開會シテ豫算ヲ議了スルトキハ終ニ成立ニ至ルカ故ニ本條ヲ適用スルノ限ニ非ラス。

○前年度ノ豫算ヲ施行スヘシトアルハ議會ニ於テ豫算ヲ議定セス、又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ其ノ結果ハ大ニシテハ國家ノ存立ヲ廢絶シ小ニシテハ行政ノ機關ヲ麻痺セシムルニ至ルニ因ル憲法義解國法學者ノ論ニ依レハ豫算ハ國家全体ノ存立ヲ保支スル所以ナリ、故ニ之ヲ議定セス又ハ成立セシメサルニ因リ支出ノ道ヲ閉クノ權ヲ議會ニ屬セシムルハ國家一部ノ機關タル議會ヲシテ其ノ全体ノ存亡ヲ決スルノ權ヲ有セシムルモノナルカ故ニ不可ナリト。又實際ニ於テモ此ノ事ニ付キ種々ノ爭議諸國ニ起レルノ後終ニ本條ノ如ク規定スルヲ以テ最モ宜シトスルコトヲ知ルニ至リシモノナリ。其ノ特ニ國法上ニ大影響アリタルハ普魯西ニ於テ千八百六十二及三年ノ間ニ起リタル

七十八

七十九

有名ナル憲法爭議ナリトス。同國ノ議會ハ千八百六十二年ノ豫算ニ於ケル兵制改革ノ費用ヲ否決シタルカ爲ニ豫算立成ニ至ラス、依テ豫算無シニ一年間政治ヲ行ヒシニ、後ニ選舉セラレタル衆議院ハ委員ノ報告ニ依リ政府ノ處分ニ對シ憲法違反ノ上奏セントシタリ。此ニ於テヒスマルクノ爲シタル演說ハ示來政事上ノ龜鑑タルノミナラス、又國法上ノ原則ト爲レリ、其ノ大畧左ノ如シ。

諸君ノ委員ヨリ諸君ニ提出シタル草案ハ諸君ト政府トノ相互ノ關係ヲシテ甚タ明瞭ナラシメタルノ効アルコト爭フ可カラス。予ノ記憶ニシテ誤ラサルキハ、未タ全ク一年ヲ經サル頃ノ事ナリケン、前ノ選舉ニ依リ組織セラレタル此ノ議場ニ於テ普魯西ニ在テハ國會ト王室ト此ノ國土ニ於ケル主政ノ權ヲ爭フトノ論ヲ爲者若アリシニ當リ諸君ハ斷然之ヲ說破シタリ、然ルニ諸君ニシテ現在ノ如キ上奏ヲ爲サントセ

此等ノ關係ニ於テハ普魯西内閣ハ英吉利内閣ニ比スレハ大ニ異ナル地位ニ立ツモノナルコト諸君之ヲ知ルヘシ。英吉利ノ内閣ハ其ノ如何ナル名稱ヲ取ルニモ係ラス國會多數ノ内閣ナリ之レニ反シ吾人ハ國王陛下ノ内閣ナリ。上奏ニ於テ論述スル如ク大臣ト王室トヲ分離スルノ制ハ王室ノ威權ヲ以テ質トシ以テ内閣ヲ庇護スルノ策トシテハ敢テ難論スヘキモノニ非ス唯タ吾人ハ此ノ庇護ヲ要セサルノミ吾人ハ吾人ノ善良ナル權利ノ地ニ立ツモノナリ。否余ハ斷然此ノ區分論ヲ非難スル所以ノモノハ他ナシ此ノ區分論ハ諸君カ其ノ實ハ内閣下之ヲ爭ハスシテ王室ト此ノ國土ニ於ケル主政ノ權ヲ爭フモノナルニモ係ラス此ノ事實ヲ隱匿スル所以ハモノト爲レハナリ。

諸君ハ憲法違反ヲ發見セル實際ノ一点ハ憲法第九十九條ニ在リ第九十九條ハ予ニシテ若其ノ文字ヲ記憶セハ凡國ノ歳入及歳出ハ各年度

ニ對シ豫メ之ヲ計算シ以テ國家會計表ニ載スヘシト云フニアリ而シテ直ニ之ニ續キ國家會計表ハ年々代議院ニ於テ之ヲ確定ストアリタランニハ諸君ハ上奏ニ於ケル諸君ノ訴意ニ對シ充分ノ權利ヲ有セリ何トナレハ此ノ場合ニ於テハ果シテ憲法ニ違背シタルモノナレハナラト然レモ第九十九條ノ本文ニ終ノモノ即チ國家會計表ハ年々法律ヲ以テ之ヲ確定スヘシトアリト覺ユサテ法律ハ如何ニ成出スルヤニ就テハ第六十二條ハ明白ニ之ヲ述ヘテ惑ハント欲スルモ難シ曰各法律ノ成立從テ豫算法律ノ成立ニ至ランニハ王室ト國會ノ兩院トノ一致ヲ要スト。サレハ貴族院ハ第二院ノ議決スル處ト爲リタルモ其ノ院ノ宜シトスル所ニ合セサル豫算ヲ拒絕スルノ權アルコト因ヨリ明白ニシテ同條ニモ現ニ其ノ明文ヲ存セリ。此ノ連合シテ發動スヘキ三ノ權力ハ原理ニ於テ全ク制限ナキモノニ

シテ、其ノ各一ハ他ノ孰レノ一ニモ譲ラス、強固ナルモノナリ。若シ此ノ三權ノ間ニ一致ヲ欠クコトアルハ、其ノ孰レノ一方ニ於テ退讓スヘキヤニ就キ憲法ハ如何ナル規定ヲモ載セス。從來ノ討議ニ於テハ人此ノ困難ヲ容易ニ看過シ、例ヲ外國ノ場合ニ取リテ他ノ二權ヲシテ代議院ノ爲ニ一步ヲ譲ランメ以テ此ノ難件ヲ解除スヘシト言フモ、其ノ據ル所タル外國ノ憲法々律ハ普魯西ニ於テ公布シタル所ニ非サルカ故ニ、普魯西ニ於テ更ニ効力ヲ有セサルモノナリ、即チ此ノ説ニ依ルハ豫算ニ就キ王室ト代議トノ間ニ一致ニ至ル能ハサルモノアルハ王室ハ管ニ自ラ代議院ノ意ニ從ヒ且代議院ノ信任ヲ得サル大臣ヲ免セサルヲ得サルノミナラス、又貴族院モ若シ代議ト一致セサルニ於テハ多ク之ニ新議員ヲ加ヘ以テ代議院ノ門下ニ降ラシメサル可カラス、此ノ如ク爲スニ於テハ代議院ノ獨立主政ノ地位ヲ確ムルコトヲ得、

シ、而、モ、此、ノ、如、キ、獨、立、主、政、ノ、權、ハ、普、魯、西、ニ、於、ケ、ル、憲、法、上、ノ、權、利、ニ、非、サ、ル、ナ、リ。

我カ憲法ハ一切ノ問題ニ關シ立法三權ノ並行等均チ斷然必要トシ從テ豫算上ノ立法作用ニ於テモ又固ク此ノ原則ヲ取り、三權ノ何レノ一ニ於テモ他チ制シテ己ニ從ハシムルコトヲ許サス、故ニ憲法ハ只タ相讓ノ道ニ出ツルハ外ニ一致ニ至ルハ策ナキヲ示スモノナリ。憲法ニ實驗アル一政治家曾テ論シテ曰ク憲法生活全体ハ何レハ時ニ於テモ相讓ノ連環ニ外ナラスト。

若シ此ノ三權ノ一ニ於テ學者的ノ絶對論ヲ以テ自家ノ所見ヲ貫徹セシメントスルニ逢ヒテ相讓ノ行ハレサルニ至ルトキハ所謂相讓ノ連環ハ此ニ斷絶シテ爭議其ノ間ニ發スヘク、國家ノ生活ハ一点ニ靜止スル能ハサルニ因リ、爭議ハ變シテ實力ノ問題ト爲ルヘシ、此ニ至レハ實

力、有、ス、ル、者、ハ、其、ノ、己、ノ、意、見、ヲ、以、テ、舉、止、セ、サ、ル、ヲ、得、ス、何、ト、ナ、レ、ハ、此
 三、至、リ、テ、モ、國、家、ノ、生、活、ハ、瞬、間、モ、靜、止、ス、ル、ヲ、得、サ、レ、ハ、ナ、リ。
 諸、君、ハ、曰、ハ、シ、ト、ス、此、ノ、理、論、ニ、依、ル、ル、ハ、王、室、ハ、少、シ、ク、意、見、ノ、異、ナ、ル、ア
 必、ニ、於、テ、モ、直、ニ、豫、算、ノ、成、立、ニ、至、ル、ヲ、障、止、ス、ル、ヲ、得、ヘ、シ、ト、而、シ、テ、理
 論、ニ、於、テ、其、ノ、當、ニ、然、ル、ヘ、キ、ハ、爭、ヒ、難、シ、是、レ、猶、ホ、理、論、ニ、於、テ、ハ、代、議、院
 ハ、全、体、ノ、豫、算、ヲ、否、決、シ、以、テ、軍、隊、ノ、解、散、又、ハ、政、府、諸、官、衙、ノ、廢、止、ヲ、誘、起
 ス、ル、ヲ、得、ル、ノ、爭、ヒ、難、キ、カ、如、シ、唯、タ、實、際、ニ、於、テ、ハ、此、ノ、如、キ、コ、ト、有、ラ
 サ、ル、ノ、ミ、理、論、上、爭、フ、可、カ、ラ、サ、ル、王、室、ノ、權、利、タ、リ、ト、モ、之、ヲ、此、ノ、如、ク、濫
 用、ス、ル、ハ、十、四、年、以、來、曾、テ、有、ラ、サ、ル、所、ナ、リ。
 目、下、ノ、場、合、ニ、於、テ、相、讓、ノ、今、ニ、至、ル、マ、テ、成、立、タ、サ、ル、ハ、其、ノ、罪、誰、レ、ニ
 歸、ス、ヘ、キ、ヤ、ニ、至、テ、ハ、吾、人、ハ、甚、タ、一、致、ス、ル、ニ、苦、ム、モ、ア、ラ、ン、然、レ、モ、今
 予、ハ、事、ヲ、追、想、セ、リ、他、無、シ、諸、君、ノ、前、ニ、組、織、セ、ラ、レ、タ、ル、代、議、院、解、散、ノ、後

ニ、於、テ、王、室、ハ、自、ラ、進、テ、諸、君、ニ、輕、少、ナ、ラ、サ、ル、讓、許、ヲ、爲、シ、タ、ル、コ、ト、是、レ、法
 リ、即、チ、王、室、ハ、諸、君、ノ、要、求、セ、サ、ル、ニ、増、稅、ノ、二、割、五、分、ヲ、減、削、シ、以、テ、豫、算
 ノ、全、額、ヨ、リ、數、百、萬、圓、ヲ、減、少、シ、タ、リ、又、王、室、ハ、豫、算、分、割、ノ、事、ニ、係、ル、諸、君
 ノ、願、意、ヲ、容、レ、テ、政、府、ニ、取、リ、テ、ハ、多、少、ノ、困、難、ナ、キ、ニ、非、サ、ル、モ、之、ヲ、實、行
 シ、タ、リ。王、室、カ、協、議、ヲ、整、ヘ、シ、カ、爲、ニ、斯、ク、マ、テ、讓、退、ス、ル、所、ア、リ、タ、ル、ニ
 モ、拘、ラ、ス、之、ニ、對、シ、諸、君、ノ、酬、イ、ル、所、ハ、何、ソ、ト、云、ヘ、ハ、九、月、ニ、於、テ、爲、シ、タ
 ル、決、議、ニ、外、ナ、ラ、ス、其、ノ、決、議、ニ、付、キ、予、ハ、左、ノ、言、ヲ、爲、ス、ヲ、辭、セ、サ、ル、ヘ、シ
 曰、諸、君、ハ、上、奏、ノ、文、面、ニ、於、テ、我、等、ニ、歸、セ、シ、ト、ス、ル、所、ノ、權、力、濫、用、ノ、罪、ハ、
 此、ノ、決、議、ニ、依、リ、却、テ、全、ク、諸、君、ノ、身、ニ、罹、ル、モ、ノ、ナ、リ、ト。諸、君、ハ、豫、算、ノ
 確、定、ニ、係、ル、諸、君、ノ、協、贊、權、ヲ、濫、用、シ、此、ノ、權、ヲ、以、テ、苟、モ、普、魯、西、國、ヲ、シ、テ
 全、ク、自、防、ノ、カ、ナ、カ、ラ、シ、メ、今、日、ニ、至、ル、マ、テ、兵、制、改、革、ノ、爲、ニ、行、ヒ、タ、ル、支
 出、ハ、其、ノ、幾、百、萬、圓、ニ、至、レ、ル、ヤ、知、ラ、ス、ト、雖、悉、ク、水、泡、ニ、歸、セ、シ、メ、將、來、ノ

數年ニ於テ更ニ此ノ支出ヲ反覆スルニ非サルヨリハ到底實行シ難キ
 ノ決議ヲ爲シタリ。諸君ニシテ果シテ諸君ノ決議ヲ實行セラレンコ
 トヲ國王陛下ニ要求シタルモノナリトセンカ(但シ決議ヲ爲シナカラ
 其ノ實行セラレンコヲ欲セサルハ此ノ如キ議院ニ於テアルヘシト信
 難キ所ナリ)諸君ハ則チ歩兵ノ半分、騎兵ノ三分ノ一、百十九ハタリヨ
 ン及其ノ數ヲモ記憶シ難キ「レギメント」ノ解放ヲ請求シタルモノニ外
 ナラス。此ノ決議ノ大体ハ既往ニ於テ已ニ行ヒ了リタル所ニ關スル
 コト是レ其ノ實行シ難キ重ナル道理ナリ。既ニ言ヘル如ク予ハ既往
 ニ關シテ辯論ヲ勉メサルヘシ何トナレハ之ヲ爲サント欲セハ事歴ヲ
 縷述セサルヲ得サレハナリ。諸君ハ今此ノ如ク過激ナル決議ヲ爲シ
 タルカ爲ニ自ラ袋路ノ道ヲ止マリニ踏ミ入りテ諸君ノ願望ニ適シタル
 脱路ヲ得ルニ苦メリ此ノ時ニ當リ政府ハ協議ヲ整ヘテハ如何トノ意

ヲ以テ諸君ニ對シ茲ニフライヘル、フアン、ヒンケノ提出ニ係ル修正ノ如
 キニシテ若シ行ハル、ニ至テハ政府ハ敢テ應對ヲ辭セサルヘシトノ
 旨ヲ宣言シタリ。然ルニ政府カ此ニ出テタルニ對シテハ諸君ニ果シ
 テ政府ノ諸君ニ期シタル所ノ地位ヲ取りタルヤ如何(左側不滿)。予ハ
 ヒンケカ此ノ修正ヲ提出スルニ至リシ所以ノ動念ニ至リテハ余ニ於
 テ之レヲ拒絕シタリ而シテ本日モ既ニ屢々見ルト同一ノ不滿ノ標ヲ
 諸君ノ間ニ見タリ、然レモ事ハ必スシモ動念ノ如何ニ依リテ決スヘキ
 ニ非ス。予ハ事ヲ決スル議會ニ臨ム丁既ニ幾回ナルヲ知ラスト雖未
 タ動念ノ如何ニ依リ事ヲ可否スルモノヲ聞カス。可否ノ依テ分ル、
 所ハ全ク案ノ善惡ニ在リテ此ノ案ヲ採ルニ於テ政府ハ寬恕ノ念ニ依
 テ動カサレ、諸君ハ學理的ノ理由ノ爲ニ促サレテ此ニ至ルモ敢テ問フ
 可キノ限リニ非ス、予ハ見ル所ヲ以テセハ代議院ハ此ハ一橋ヲ渡ル以

テ前後ヲ通スルヲ正當トシタリ、若シ此ニ出テタランニハ諸君ハ千八百六十三年ノ豫算ニ係ル爭論ヲ猶ホ前年ノ内ニ於テ解除スルヲ得シナルヘク代議士フオンペンケノ修正ニ於テ促ス所ノ千八百六十三年ノ豫算ノ如キモ前年ニ於テ既ニ之ヲ整頓セシムルコトヲ得カリシナリ。此クスルキハ以テ最大難件ノ一ヲ解除シ得ヘカリシニ惜イカホ諸君ハ斯クマテ協議ヲ整ヘシトスル吾人ノ奮勵ニ對シ遂ニ知解ニ至ルヘキ一切ノ望ヲシテ絶タシムルノ決議ヲ爲シタリ。

時ニ閉會ヲ告ケタル所以ノモノハ他ナシ諸君カ吾人ヲ去ルノ時ニ於テヨリモ更ニ寛恕ニ適シタル心情ヲ以テ歸來センコトヲ望ミタルハナリ。諸君ハ王室ヨリシテ釀退ヲ望メリ、余輩ハ之ヲ諸君ニ望ムナリ。政府ノ確信スル所ヲ以テセハ今ニ於テ讓許ヲ爲スノ順ハ諸君ニ在リ諸君ニシテ若シ此ノ讓許ヲ爲サ、ランカ吾人ハ目前ノ爭議ヲ脱スル

ト下蓋シ難キモノアラシ。貴族院カ諸君ノ議決シタル所ノ豫算法律ヲ以テ國家ノ必要ニ適セサルモノトシテ拒絕シタルハ王國政府ノ見ル所ヲ以テセハ最モ正當ナル次第トス。是ニ於テ豫算ハ全ク成立セサルニ至レル場合ハ事實トシテ起レリ、人或ハ此ノ如キ場合ノ有ル能ハサルヲ論シタルモ事實ハ其ノ論ノ非ナルヲ證明シタリ、而シテ今ノ如キ場合ハ必ス幾回モ起ルコトアルヘシ。王室ト貴族院トナシテ各法律ニ協賛スルノ權アリ從テ豫算上ノ法律ニモ協賛スルノ權アラシム憲法ノ規定ニシテ果シテ無妄ナラストセンカ、豫算不成立ノ場合ト必ス屢々起ルヘキナリ。

此ノ点ニ關シ憲法ニ欠点アリトスルハ決シテ新シキ發明ニ非ス。手ハ憲法改正ヲ議定スルノ當時ニ於テ自ラ其ノ局ニ當リ數日ヲ費シテ此ノ場合ノ有リ得ヘキヤ否ヤヲ綿密ニ論究シタリ計ラサリキ四年ハ

後ニ於テ始メテ此ノコト事實トナラントハ。但シ此ノ如キ場合ノ決
シテ起ルコトナシトハ當時ニ於テ何人モ思ハサル所ナリキ只タ其ノ
果シテ起ラントスルニ臨ミ之ヲ防止スルノ方法如何ニツキ種々異論
アリタルノミ。

以上論辨スル所ニ依リ予ハ政府ハ憲法ニ違反シタリ憲法ノ許サ、ル
所ヲ爲シタリトスルノ論ヲ斷然充分ノ確信ヲ以テ拒否セサルヲ得ス
是ニ至テモ予ハ又嘗テ委員會ニ於テ述ヘタル所ヲ反覆セントス、曰余
輩ノ憲法ニ立テタル誓旨ヲ守ルニ熱心ナルハ猶ホ諸君カ諸君ノ誓旨
ヲ守ルニ熱心ナルカ如シト。請フ吾人ヲシテ確信ニ背カサルノ決心
ヲ反對者ニ就テモ尊敬スルヲ知ラシメヨ、之ヲ知ラハ吾人ハ憲法違
反ヲ以テ誣ヒラレ誓旨破壊ノ非難ニ遇ヒテ甘シテ之ヲ受クルノ甚タ
難キヲ知ルヘキナリ。

豫算ノ成立セサルニ於テハ果シテ如何ナル方法ヲ採ルヲ正當トスル
ヘキヤニ關シテハ種々ノ理論アリト雖予ハ此ニ之ヲ可否スルノ勞ヲ
取ラサルヘシ。甲者ハ曰、新豫算ノ未タ成立セサルニ際シテハ前年ノ
豫算ハ自然ニシテ繼續セリト又乙者ハ曰、新豫算ノ成立セサル場合ニ
於テハ空虛ヲ容レサルハ法律ノ原則ナルニ依リ新法ノ及ハサル所ハ
悉ク舊法ノ充タス所トナルヘキヲ恰モ州法ノ盡サ、ル場合ハ「ヨアキ
ミカ」ニ返リテ事ヲ決シ或ハ新典ノ至ラサル場合ニ於テ舊格及土代ノ
國令ニ依リ事ヲ定ムルカ如シ故ニ國家會計ニ係ル法律ノ欠乏ニ際シ
テモ憲法以前ニ返リテ專政政府ノ全權ヲ以テ之ヲ補フヲ可ト。
予ハ今此等ノ理論ヲ推考セサルヘキモ之ヲ要スルニ予ニ於テハ國家
ハ現ニ存在スト云フヨリ起ルノ必要ヲ知ルノミニシテ則チ足レ、而
シテ國家ハ若シ人國庫ヲ閉スルニ至レハ果シテ如何ニナリ行クヘキ

ヤト云フカ如キ悲哀ナル想像ハ其ノ敢テ關繫スル所ニ非ス。事ノ標準ハ必要ノ一ニ在リ只タ其ノ必須ノ度ヲ測ルニ於テ過ナカルベキノ思フニ政府ヲシテ國債ノ利子官吏ノ俸給ニ至ルマテモ支拂ヲ中止セシムルハ諸君トイヘテ敢テ吾人ニ望マサル所ナルヘキ乎。

現ニ起レルカ如キ事情ハ憲法ニ戻レリトハ予ノ前後ニ於テ斷然拒否スル所ナリ。此ノ如キ見解ハ憲法ニ誓ヒタル幾多ノ官吏中之ヲ取ルモノ一人モ無キ義ナリト信セサルヲ得ス何トナレハ官吏中其ノ政府ニ服役スルコトヲ拒絶シ一月一日以後ハ俸給ヲ受ケサル可シト宣言シタル者ハ未タ一人モ有ラサレハナリ。予ハ敢テ官吏ヲ是非セントスル者ニ非ス、只タ此ノ事實ニ依リ左ノ如キ結論ヲ爲サント欲スルノミ曰、政府ハ憲法ノ許サ、ル所ヲ爲シタリトノ確信ハ未タ必スシモ不拔ナルモノニ非ス、若シ是レ確論ナランニハ數千ノ官吏中ニ良心ノ發

作ニ依テ此ノ如キ政府ノ事務ニ與カルコトヲ拒絶スル者ヲ生スヘキ理ナリト。加之吾人現在ノ事情ハ之ヲ十四年以來年々豫算ノ議定ニ至ル前始四ヶ月乃至六ヶ月ノ間ハ豫算ヲクシテ政務ヲ行ヒ來ルノ例ニ比シテ一層憲法ニ戻レリト爲ス所以ノモノヲ見サルナリ。

諸君ハ曰諸君ニ於テ豫算ノ或ル部分ヲ斷然否決シタルカ爲ニ現在ノ地位ハ一層困難ヲ加ヘタリト、然レトモ余ハ諸君ノ許可ヲ得テ一言セントス諸君ノ決議ハ只タ諸君ノ決議タルノミニテハ更ニ法律上ノ効力ヲ有セス諸君ハ諸君ノミニ於テ爲シタル決議ニ依リ或ル支出ヲ命令スルヲ得ス又豫算法律ノ存セサル場合ニ於テ何レノ点マテハ國家ノ急務ヲ満足セシムルヲ得ヘキヤニ付キ法律上ノ制限ヲ付スルコトヲ得ス。諸君ノ決議ヲシテ一ノ法律上ノ規定タルニ至ラシメンニハ必ス常ニ貴族院ノ同意ト國王ノ裁可トノ之ニ加ハランコトヲ要スヘ

シ。此ノ二者ノ未タ加テサルニ於テハ法律ハ未タ存立セス而シテ政
 府ハ只タ諸君ノ決議アルノミニテハ何ヲ爲スノ權利ヲ得ス又義務ヲ
 得サルナリ。予ハ諸君ト此ニ排難辨論ヲ闘スコトヲ爲サ、ルヘシ然
 リトイヘズ諸君ハ予ノ言論ニ依リ既ニ余輩ハ憲法ニ違背セストスル
 予輩ノ確信ノ堅牢ナル所以ヲ知ルベク、隨テ諸君カ憲法ノ許ス所ノ制
 度ヲ越エテ諸君ノ權力ヲ擴張セントスルニ當テハ政府ハ尙モ陛下ノ
 信任ヲ辱フスル限りハ斷手トシテ之ニ反對セントスル決心ノ堅牢ナ
 ルヲ知ルヘシ。
 苟モ憲法ノ諸君ニ許ス所ノ權利ト諸君毫末モ減縮スル所ナクシテ之
 ヲ受クヘシ諸君ノ之ヲ越エテ要求スル所ハ吾人之ヲ拒否シ諸君ノ要
 求ニ反シ永ク王室ノ權利ヲ認メテ息マサルヘシ蓋シ斯ク討議スル所
 以上奏案ヲ陛下ニ奉提セントスルノ今日ハ恰モ他日儲君タルヘキ王

子ノ誕辰ニ際スルコト遇然ト謂ツ可シ。此ノ時ニ遭遇スルニ於テ吾人
 ハ二重ノ事業ヲ吾人ノ道ニ横ハルヲ知レリ、曰王家ノ權利ヲ固守シ陸
 下後嗣ノ權利ヲ確保スル是レナリ、普魯西王國カ未タ其ノ天ニ受ケタ
 ル命ヲ盡シスルニ至ラサル今日ハ諸君ノ主張スル憲法上ノ結構ノ如
 キ純然タル虚色ヲ營ムノ時ニ非ス、今ニ於テ要スル所ハ靈祇自在ノ運
 動ナリ、議院政治ノ機械的運動ヲ容ルノ時ハ未タ至ラサルナリ。
 抑、普魯西ニ於テ上述ノ如キ爭議ノ起リタル所以ノモノハ豫算ヲ議定
 セス、又ハ其ノ不成立ノ場合ニ於テ國家ノ財政ハ當ニ如何スヘキヤト
 云フニ就キ規程ヲ存セサルカ故ナリ。今又他ノ諸國ノ制ハ如何ト云
 フニ、佛蘭西、埃太利、亞米利加、普魯西ト同様ナリ。索遜ニ於テ憲法ニ此
 ノ事ニ關スル第三百三十一條アリシモ同シク爭議ニ至リタルニ因リ千
 八百五十一年五月三日ノ法律ヲ以テ改正シタリ、其ノ大意ニ曰國會ヨ

豫算ニ意見ヲ添ヘテ政府ニ提出スルトキハ政府ハ此ノ意見ニ依リ更ニ鄭重ノ審議ヲ爲シ若シ其ノ意見ヲ以テ容納シ難キモノト爲ストキハ之ヲ却下シ國會ヲシテ再議セシムヘシ。國會若シ固ク執リテ豫算ノ承諾ヲ拒ムカ又ハ既ニ解散ヲ命セラレタルトキハ國王ハ勅令ヲ發シテ豫算年度ノ終期ニ於テ現年度ノ爲ニ前年度ニ定メタル租稅ヲ徵集スルコトヲ命スヘシ。國會ニ於テ豫算年度ノ終期マテニ豫算ヲ議決セサルトキハ上ニ同シク一年間前年度ノ會計法ニ依ルヘシ。但シ此ノ命令ヲ發スルハ國會ニ於テ豫算年度ノ終期ノ前十四日マテニ徵收ヲ許可スルノ假法ヲ議決セサルカ又ハ事情止ムヲ得サルニ因リ國會ヲ召集シ得サリシ時ニ限ル。

又瑞典憲法第九條第三項ニ曰「若シ國會ノ閉會ニ至ル前ニ歳出豫算ヲ議決セス又ハ徵稅ヲ以テ供給スヘキ歳入豫算ヲ確定セザリシトキ

ハ次ノ國會開會ニ至ルマテ前年ノ歳計豫算適用ヲ繼續スヘシ。若シ歳入ノ全額ヲ議決シタルモ其ノ配分ハ付兩院ノ一致整ハサルトキハ議決ヲ經タル歳入出額ト前年度ノ議決ニ依リ既ニ配分ヲ決行シタル歳入ノ全額トノ間ニ成立セル比例ヲ以テ各款項ニ記載シタル歳入ヲ増減スヘシ。此ノ場合ニ於テ國會ハ銀行及公債委員ニ委任シ既定ノ基礎ニ從ヒ商議シ及新ニ命令ヲ發セシムヘシ。

ドイツ憲法第六十二條ニ曰「有期租稅ハ左ノ場合ニ於テハ滿期ノ後六ヶ月尙ホ徵收スルヲ得」

一、歳出入豫算ヲ議決セサル前議會解散ヲ名セラレタルトキ

二、兩院ノ議事久シキニ彌リテ結局ニ至ラサルトキ

西班牙ノ追加憲法第七條ニ曰「若シ歳計豫算法ニ付兩院ノ協議整ハサルトキハ前年度ノ豫算法ヲ

適用スヘシト
然レハ即チ議會議決ノ如何ニ依リ國家ヲシテ無豫算ニ陥ラシムルノ
防禦トスヘキ規程ハ各國ノ或ハ其ノ必要ヲ感シ或ハ既ニ設ケタル所
ナリ。

前年度ノ豫算ニ依ルト云フニ關スル一ノ問題ハ豫算成立セサル場合
ニシテ若シ二年繼續セハ如何ト云フニ在リ。其ノ第二年ニ於テハ前
年度ノ豫算ト指ス可キ者存セサルヨリ或ハ疑ヲ生スヘシト雖其ノ實
ハ前年度ノ分ニ依ル可キコト明白ナリトシテ尙ホ疑ノ遺レルモノハ他
無シ前年度ニ於テ豫算外ニ起リテ國會ノ承諾ヲ經タル歳出ハ其ノ翌
年ニ至リ更ニ之ヲ支出スルコトヲ要スルヤ否ヤト云フ是レナリ。是
レ其ノ場合ノ起ルヲ待テ決ス可キノ問題トス。
又一ノ問題ハ前年度ヨリ本年度ニ涉レル繼續費アリテ兩年ニ於テ其

支出額ヲ異ニスル場合ニ關ス。例ハ前年度ハ十万圓ナリシモ本
年度ハ十二萬圓ナリトセンニ前年度ノ豫算ニ依ルトキハ本年度ニ於
テモ十万圓ヲ支出スルノ外ナシ然レモ是レ最初ノ計畫ニ違フコトナ
レハ不便不利ナルモノアリ加之繼續費ハ當初ニ於テ既ニ全体ニ涉リ
協賛ヲ經タルモノナレハ例ハ大体ハ前年度ノ豫算ニ依ルヘキ場合ト
雖其ノ例外ト爲スヘシト云フコト一般ノ論ナリ。

第七十二條 國家ノ歳出歳入ノ決算ハ會計検査院之
ヲ検査確定シ政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ之ヲ帝國議
會ニ提出スヘシ。

會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム
決算ハ豫算ト相俟テ帝國議會カ政府ノ財政ヲ監督スル所以ノ者ヲ爲
セリ。財政ノ性質トシテ法律ヲ以テ確定スル能ハサルカ故ニ半ハ命

令ノ性質ヲ以テ豫算ヲ作り、必要ニ應シ政府ノ獨立權ヲ以テ變更シ得可キモノトセリ、從テ變更ハ敢テ各メサルモ其ノ果シテ十分ノ必要アルニ出テタルヤ、及其ノ變更ニ屬セサル部分ノ如キモ十分法律ヲ遵由シタルヤ否ヤヲ糾サ、ルヘカラス。是レ決算ヲ報告セシムル所以ニシテ其ノ目的ニ二アリ、即チ(一)算數上ノ正否ヲ明ニスル、(二)處分上ハ當否ヲ明ニスル事是レナリ。算數上ノ正否ハ加減乗除ノ正否及其ノ現金ニ合スルト否ト云ヒ處分上ノ當否ハ豫算ヲ以テ定メタル歲出歲入ノ款項ニ違ハサルヤ、此ノ款項ノ爲ニ定メタル金圓ヲ以テ之ヲ仕拂ヒタルヤ、及豫算外ノ仕拂ヲ爲セシヤ否ヤヲ糾スヲ言フ。故ニ會計検査院ハ此ノ二點ニ就キ政府ノ決算ヲ検査シ、算數上ノ正否ハ其ノ院ノ職權ヲ以テ會計法及會計規則ニ依リ之ヲ處分シテ其ノ始末ヲ報告シ、處分上ノ正否モ之ヲ帝國議會ニ報告シ當該ノ行政官應ラシテ其

實ニ任シムヘキナリ。會計検査院ノ性質ハ上文ニテ略ホ明瞭ナルヘシ。此ニ一言スルハ其憲法實施以前ト以後トニ於テ必ス組織職權ヲ異ニセサルヲ得サルハ是レナリ。憲法以前ニ在テハ一切ノ法律ハ假令法律ノ名ヲ有スルモ天皇ノ全權ヲ以テ之ヲ發シ、必要ヲ見レハ全權ヲ以テ自由ニ變更スル所ナルカ故ニ實ハ補充命令ニ外ナラス、豫算ノ如キモ只、算數上ヲ正シウスルノ責任アルノミ、必スシモ規定ヲ變更セサルノ責アラザリキ。故ニ從來ノ會計検査院ハ政府ノ一部トシテ内閣ニ附屬シ、專ラ算數上ノ検査ヲ爲シ處分上ノ検査ノ如キハ大藏省ノ出納上ニ於テ不便ヲ避シカ爲ニ主計局ニ於テ之ヲ爲スコト多カリキ、從テ豫算ヲ超過シ或ハ豫算外ノ支拂ヲ必要トスルニ於テモ、先ツ主計局ニ之ヲ計リ、其ノ許容セサルニ於テハ内閣ニ之ヲ計リ、其ノ認許ヲ得ハ行政權ノ範圍ニ於テ

隨意ニ動かスヲ得タリ、又會計検査院ニシテ或ル一省ノ決算ノ豫算ノ款項ニ違背セルヲ發見スルモ只タ之ヲ内閣ニ報告スルマテナリキ。然ルニ憲法一タヒ立テ帝國議會ニ於テ協賛承諾ノ權ヲ取ルニ至ルハ會計検査院カ内閣ノ爲ニ決算ヲ検査スル地位ハ一轉シテ帝國議會ノ爲ニ此ノ事ヲ爲スノ地位ニ入レリ、且ツ内閣ノ經費ノ如キモ之ヲ検査セサルヲ得サルカ故ニ、内閣トハ獨立シタル機關トナラサルヲ得ス。即チ普魯西ニ於テ其ノ會計検査院ニ關シ一千八百六十二年及七十二年ノ兩度ニ行ヒタル改革ノ如キモ此ノ方向ニ出ツルモノナリ。既ニ内閣ヨリ獨立ストイヘトモ亦内閣ノ爲ニ各省廳ノ會計ヲ検査スルノ任ハ未タ解ケサタルニ非ス、從テ全ク帝國議會ノ機關ト成ル可キニモ非ス、要スルニ政府ト帝國議會トノ双方ノ爲ニ存シテ其ノ局外ニ中立セサルヲ得ス。立法行政ノ局外ニ中立スル者ハ元首ナリ。故ニ

明治三十二年五月法律第十五號ヲ以テ新ニ會計検査院ノ組織ヲ定ムルニ當リテハ之ヲシテ政府ヨリ獨立セシメ其ノ組織ハ恰モ一個人ノ裁判所ノ如キ合議体ヲ成シ、其ノ吏員ノ如キモ裁判官懲戒ノ如キ者ノ下ニ立ツニ至ラシメタリ。今同法中會計検査院ノ國法上ノ性質ヲ規定セル條項ヲ抽出セハ左ノ如シ。

(第一條)會計検査院ハ天皇ニ直隸シ國務大臣ニ對シ特立ノ地位ヲ有ス。
 (第十二條)會計検査院ハ官金ノ収支官有物及國債ニ關ル計算ヲ検査確定シテ會計ヲ監督ス。(第六條)會計検査官ハ勅令ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス、會計検査官ハ刑事裁判若ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其ノ意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラレ、コトナシ、會計検査官ニ關ル懲戒ノ條規ハ別ニ定ムル所ニ依ル。(第七條)父子

兄弟ハ同時ニ會計検査官トナルコトヲ得ス。(第八條)會計検査官ハ他ノ官職ヲ兼テ及帝國議會又ハ地方議會ノ議員トナルコトヲ得ス。(第九條)會計検査院ノ議事ハ總會議又ハ部會議ヲ以テ決ス總會議ハ院長ヲ以テ議長トシ部會議ハ部長ヲ以テ議長トス議事ハ多數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決メル所ニ依ル。(第十條)左ノ場合ニ於テ
 一 總會議ヲ以テ議決ス
 二 第十五條ニ依リ上奏ヲ爲シ又ハ天皇ノ下問ニ奉答スルトキ
 三 第十四條ニ依リ報告書ヲ確定スルトキ
 四 第十七條ニ依リ意見ヲ陳述スルトキ
 五 四) 検査事務ノ規程計算證明ノ様式及提出ノ期限ヲ定メ又ハ之ヲ改正スルトキ
 六 五) 其ノ他院長ニ於テ總會議ニ付スルノ必要アリト認メタルトキ。(第十一條)計算検査ノ判決ハ凡テ會議ニ於テス其ノ總會議ニ於テスルト部會議ニ於テスルトハ會計検査院長ノ定ムル所ニ依ル。(第十三條)會計検査院ノ検査ヲ要スルモノハ左

如シ、
 一 總決算、
 二 各官廳及官立諸營造ノ收支及官有物ニ關ル決算、
 三 政府ヨリ補助金又ハ特約保證ヲ與フル團體及公立私立諸營造ノ收支ニ關ル決算、
 四 法律勅令ニ依リ特ニ會計検査院ノ検査ニ屬セラレタル決算。(第十四條)會計検査院ハ憲法第七十二條ニ依リ決算ヲ検査確定スルト同時ニ左ノ諸項ニ付報告書ヲ作ルヘシ、
 一 總決算及各省決算報告書ノ金額ト各出納官吏ノ提出シタル計算書ノ金額ト符合スルヤ否ヤ、
 二 歳入ノ賦課徴収歳出ノ使用官有物ノ得有沽賣讓與及利用ハ各、其豫算ノ規程又ハ法律勅令ニ違フコトナキヤ否ヤ、
 三 豫算超過又ハ豫算外ノ支出ニシテ議會ノ承諾ヲ受ケサルモノナキヤ否ヤ。(第十五條)會計検査院ハ各年度ノ會計検査ノ成績ヲ上奏シ其ノ成績ニ就テ法律又ハ行政上ノ改正ヲ必要トスヘキ事項アリト認ムルトキハ併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得。(第十七條)金庫ノ出納及簿記上ニ關ル各省ノ

命令ニ付會計検査院ハ其ノ發布ノ前通知ヲ受ケ意見アルトキハ之ヲ陳述スルコトヲ得會計検査院ハ收入及支出ニ關ル規則ヲ定メ及既定ノ規則ヲ改正スル各省ノ命令ニ付其ノ發布ノ前通知ヲ受ク。(第十九條)會計検査院ハ各官廳ヲシテ検査上必要ナル簿書及報告ヲ提出セシメ及主任官吏ノ辨明書ヲ求ムルコトヲ得會計検査院長ハ検査上必要ト認ムルトキハ主任官吏ヲ振遣シ實地検査ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ豫メ本屬長官ニ通知シ該長官ハ主任官吏ヲシテ検査ニ立會ヌ爲サシムルコトヲ得。(第二十條)會計検査院ハ出納官吏ノ計算書及證憑書類ヲ検査シ正當ナリト判決シタルトキハ該官ニ對シ認可狀ヲ付シ其ノ責任ヲ解除ス若必要ナル場合ニ於テハ之ヲ推問シ辨明又ハ正誤ヲ爲サシメ仍正當ナラスト判決シタルトキハ本屬長官ニ移牒シテ處分ヲ爲サシム。(第二十一條)會計検査院ノ判決ニ據リ辨償ノ責ヲ負フ

者ハ天皇ノ恩赦ニ由ルノ外本屬長官之ヲ減免スルコトヲ得ス。(第二十二條)出納官吏計算證及證憑書ノ提出ヲ怠リ又様式ヲ守ラサルトキハ會計検査院ハ本屬長官ニ移牒シテ懲戒處分ヲ要求スルコトヲ得。(第二十三條)政府ノ機密費ニ關ル計算ハ會計検査院ニ於テ検査ヲ行フ限ニ在ラス

○政府ハ其ノ検査確定ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ。検査確定シ報告書ヲ議會ニ提出スルハ議會ヲシテ其ノ豫算協賛ノ權ヲ結果ヲ取リシムル所以ナリ。然レトモ其ノ提出スル所ニ就キ議會ハ何等ヲ處置ヲ爲スヘキヤニ至リテハ憲法ハ一言セス且各國ニ於テモ是レ一ツ問題ト爲レリ。但シ提出ノ目的ノ議會ヲシテ歳出歳入ノ果シテ豫算ニ違越セサルヤ及算當ニ差錯ナキヤヲ精査セシムルニ在ルコトハ疑ヒ無シ而シテ豫算ニ違越セス且違算ナキトキハ其ノ儘々ニシテ止

議院ハシトイヘル若違越違算アルヲ認ムルトキハ則チ如何ト云フコト
問題ナリ。

一方ノ論ニ依ルトキハ憲法既ニ會計検査院ヲ以テ會計ニ關スル終審
ノ處ト爲スカ故ニ會計検査院ノ豫算違越ニ非ス、又違算ナシトシテ報
告シタルコトハ國會ニ於テ其ノ決算ヲ以テ之ヲ違越ナリ違算ナリキ
爲スコトヲ得ス。又議會ハ検査院ニ對シテ質問ヲ爲スコトヲ得ス、唯
タ政府ニ對シ質問スルノ權ヲ憲法ニ依リ有スルノミナリ。此ノ論ハ
即チザイテル(巴威里法論國第四卷第四百三十二頁)ノ取ル所ナリ、即チ
「政府ハ實ニ決算報告書ヲ議會ニ提出センコトヲ要ス、然レトモ決算ヲ
提出スルヲ用サス。政府ハ議會ノ決議ニ因リ始メテ洗除ヲ被ルニ非
ス、約言ニハ議會ハ高等決算再審處ナルニ非ス、會計検査院ナルニ非ス」

決算報告書ヲ議會ニ提出スルハ財務行政ヲ爲ニ決算ヲ監督スルニ在
ルニ非ス、唯タ議會ノ爲ニ其ノ豫算協贊權ニ關シ國法上ニ於テ立ツ所
ノ地位ヲ確保スルニ在リ」中
「議會ニシテ決算報告書ヲ審査スルノ權アル上ハ議決法ヲ以テ其ノ審
査ノ結果ヲ確定スヘキコト勿論ナリ、然レトモ前述ノ如ク此ノ確定
ハ決算査定ノ性質ニ出ツヘキニ非ス、唯タ議會ノ本來有スル所ノ職權
ヲ範圍内ニ止マルヘキモノトス即チ左ノ如シ」
「議會ハ適宜ノ体裁ニ於テ決算報告ヲ満足トスルヤ否ノ意ヲ表白ス
シ。即チ決算認承ノ旨ヲ宣告スルカ、又ハ左右ニ托シテ此ノ宣告ヲ爲
スコトヲ拒絶スヘキモノナリ。」
「此ノ決算承認ハ實ニ解責ノ意味アルニ非ス、然リトイヘル亦全ク無旨
趣ナルニ非ス。即チ是レ議會ハ其ノ外形上ノ權利ヲ行用シテ以テ政

府ノ責任ヲ要求スヘキノ理由ヲ發見セス、少ナクトモ此ヲ要求ヲ爲ス
ノ意ナキコトヲ表白スルモノナリ。」

「決算ヲ認承拒絶ハ自ラ一定ノ効力ヲ有セス、唯タ或ル点ニ於テ正經ナ
ラサルモノアリトスル議會ノ意見ヲ確定スルニ止マレリ。此ヲ確定
ニ因リ實際ノ結果ヲ生スルト否トハ議會ニ於テ之ニ依リ或ル他ヲ外
形上ノ權利例ハ大臣告訴ニ使行セントシテ決スルト否トニ因レリ。然
レトモ此等ノ權利ニシテ議會全体ニ屬スルトキハ其ノ一院ニ於テ認
承ヲ宣告シタルトキハ則チ之ヲ使行シ難シト。」

然レトモ議會ノ決算審査權ヲ以テ斯ク効力薄弱ナルモノト爲スコト
ニ就キテハ異論ナキニ非ス、就中各國ノ國會ニ於テ反對ノ議論屢起レ
ルコトハラバンド氏豫算論ニ普魯西ノ事實ヲ述フル處ニ於テ見ルヘ
シ（原書第七十頁法制局翻譯第二百二十二頁）

「國會ヲシテ政務上ノ問題ヲ解カシムルカ爲會計検査院ノ國會ヲ助カ
ルハ唯憲法第一百四條ニ規定セル左ノ一件アルノミ」
各年ノ國用總計算及國債ノ一覽ハ會計検査院ノ記入ヲ以テ政府ノ
責任ヲ解キタル上之ヲ議院ニ提出スルモノトス
然レトモ此條文ハ未タ完全ノモノト謂コトヲ得ス、幸國憲法ニハ往々
晦澁不啻ノ條文多ク爲ニ世人ノ爭論ヲ招クコト稀ナラサルカ此條文
モ亦曖昧糢稜其明了ヲ缺クモノト謂ヘキナリ抑右條文ニ所謂會計檢
査院ノ記入トアルハ一切ノ記入ヲ指スモノナルカ又ハ國會ニ提出ス
ル記入ニハ或ル一定ノ種類アリテ必ス此ノ種ノ記入ヲ要スルモノカ
ルカ將タ又會計検査院ハ計算ノ如何ナル個條ニ附テ記入スヘキモノ
ナルヤ該條文ハ此等重要ナル諸点ヲ一モ明示スル所アラサルナリ憲
法ノ不明既ニ斯ノ如シ宣哉之カ爲國會議場ノ葛藤ヲ醸成シテ年來落

著ヲ看ル能ハサルナリ
 會計検査院ノ記入ヲナスコトニ附會計検査院ノ問題ハ之ヲ三種ニ分
 ツヘシ是レ既ニ上陳セシ所ナリト雖今再之ヲ列舉スレハ第一各自計
 算書勘定ノ正否ヲ檢閲シ第二支出ノ歲計ニ違背セル廉ナキヤヲ檢閲
 シ第三計算檢閲ノ際行政管理方ノ宜カラサルコトヲ見出ストキハ之
 ヲ摘撥スヘキニ在リ
 計算書ヲ國會ニ提出スルニハ從來唯第一種ノ記入ヲ爲セシニ止マリ
 即チ會計検査院ニテ逐目ノ計算ヲ點檢シ若シ各料目ノ計算ヲ始メ之
 ニ附屬セル受取書證文類及算出ノ惣金額等全ク整頓シテ毫モ漏異算
 ナキカ又ハ縱令脱漏異算アリシモ其點ハ會計検査院ノ通告ニ因リテ
 既ニ改正セラレタルトキハ會計検査院ヨリ計算書ニ相違ナキ旨ノ記
 入ヲナシ以テ國會ニ提出スルナリ國會ニ提出スヘキ計算書ニハ會計

検査院唯此一證ヲ附シテ其記入トナスニ止マリ更ニ他ノ記入ヲナス
 コトナシ即チ千八百五十年ノ國會ニ於テ政府ノ計算ヲ是認シテ其責
 任ヲ解カシメタルモ國會ノ據リトコロトナセシハ實ニ此記入アリシ
 チ以テナリ然レトモ此ノ如キ方法ヲ以テ政府ノ責任ヲ解カシムルハ
 眞ニ有名無實ノモノタルハ亦國會ニ於テ屢唱論セラレ、所ニシテ殊
 ニ代議士キョー子氏カ國會ニテ演說セシ從來ノ如キ政府責任ノ解免方
 法ハ是レ眞面目ノ仕方トモ思ハレス譬へハ是假面ヲ被リテ戲踏スル
 ト何ノ異ル所カアラントノ一言ハ最モ喝采ヲ博シテ衆人ノ贊成ヲ得
 タル所ニシテ且最モ味フヘキ言語ト謂フヘキナリ抑度支總計算ナル
 者ハ畢竟各科目計算ノ結果ヲ集合セル者ニ過キスシテ其計算ハ正確
 ナルコトヲ調査スルモ唯計算書表面ニ記載セル金額ヲ更ニ牙籌ヲ執
 リテ算用スルニ在ルノミ故ニ會計検査院ニテ各科目計算ノ正確ナル

旨ヲ保證シ又總計算ノ勘定ニ相違ナキコトヲ證明シテ之カ證書ヲ作
 リントテ國會ハ之カ爲メ格別ノ利益ヲ享クルモノニアラサルベシ何
 則時宣ニ據ラハ總計算書ヲ覆案再算シテ會計検査院ハ正確ニ合算セ
 シヤ否ヲ確メサルヘカラサレハナリ此ニ因テ之ヲ觀レハ國會ハ會計
 検査院ヨリ計算會外形上ノ正確ヲ證明セル記入ヲ得タルニ止マリ之
 ニ反シテ收支ノ實額果テ正當ノモノナルヤ法律ニ戻ラサルモノナル
 ヤ成規ノ手續ヲ履行セルモノナルヤニ付テハ未ダ會計検査院ノ
 助力ヲ以テ審査シ得ヘキ所ニアラサルナリ國會ヲシテ之カ審査ヲ爲
 シ得ヘカラシメント欲セハ其唯國會ノ自ラ組織セル國會會計検査院
 ナルモノヲ設ケ之ヲシテ會計検査院ノ調製セル一切ノ書類ヲ自由ニ
 展閱シテ會計検査院ノ調査セシ計算ヲ再ヒ調査セシムルニ在ルベシ
 此ノ如ク會計検査院ハ唯外形上ノ検査ヲ爲スニ止マルヲ以テ近來國

會ノ兩院ハ益會計検査院ニテ實際調査ノ記入ヲナサンコトヲ請求シ
 而テ實際調査ノ方法タルヤ之ヲ分テ別項調査及總括調査ト爲シ別項
 調査ニテ各自ノ計算ヲ調査シテ是認スヘキ者ハ是認ノ記入ヲ爲シ認
 可スヘカラサルモノハ不認可ノ附箋ヲ爲シ又總括調査ニテ會計ノ現
 狀及行政上ノ缺典ヲ一般ニ舉止セシムルニ在リ(註)蓋行政上ノ缺
 典ヲ指摘セシコトヲ望メル國會ノ請求ハ政策上ノ得失ヨリ論スルト
 キハ實ニ正當ノ請求ニシテ其利益必多カルヘシ然レトモ政府ノ責任
 ヲ解カシムルニ付必ス行政上ノ當否ヲ検査スヘシト爲スハ國法上斷
 然不當ノ請求ト謂ハサルヲ得ス夫行政上ノ惡弊ヲ指摘シテ改良方ヲ
 將來ニ計畫セシムルハ政策上甚得策ナリ然レトモ國會ハ之ニ因リテ
 成規ニ從ヒ且法律ニ基ケル既往ノ支出ニ溯リ大臣ヲ詰問シテ其責任
 ヲ負ハシメ又ハ其責任ヲ増サシメ得ルモノトナスハ決シテ正當ノ論

ニアラサルヘシ且夫會計検査ノ職務上ヨリ論スルモ議院ヲシテ政府ノ責任ヲ解カシムルノ目的ヲ以テ毎年行政ノ缺典ヲ指摘シテ之ヲ議場ニ報告スルハ法律上其ノ義務ト云ヘカラス加之會計検査院ノ明言セシ不認可ノ廉ヲ公然世ニ露呈セシムルハ政治上ノ妨害トナルコト鮮キニアラサルナリ」中略

吾人猶論究考定ヲ要スル者アリ何ソヤ曰豫算法ノ調製ヲ得ザリシトキハ國法上如何ナル結果ヲ有スヘキヤノ一點是レナリ蓋是世人ノ頗ル論決ヲ難スル問題ニシテ殊ニ政府ト國會トノ間ニ憲法上ノ見解ヲ異ニセシヨリ惹起セシ彼ノ所謂憲法上爭論ノ當時ニ方リテ政府國會各此ノ問題ニ關シテ其意見ヲ別ニシ其紛議ハ大ニ政治上ニ影響ヲ及ホシ其議論ノ熾ナル遂ニ世人ヲシテ此ノ問題ヲ視テ憲法難議ノ第一ニ居ルモノト思惟セシムルニ至リ獨リ實際ノ政治家ノミ然ルニアラ

ス又國法學ヲ以テ一世ニ鳴レル碩儒例ハフホン、レンチ氏其人ノ如キニ至ル迄翕然トシテ其說ニ左袒シ翕曰憲法ノ疑點多シト雖豫算法ノ調製ヲ得サルトキノ此問題ハ實ニ千百憲法問題ノ心核ト稱スヘキ者ナリト然トモ余輩ノ見ル所ヲ以テスレバ此說誤レリト謂ハサルヲ得ス國會一切ノ収支ハ各年豫メ之ヲ提出シ而テ之ヲ國用歲計ニ記載スヘク又國用歲計ハ毎年法律ニ因テ之ヲ定ムヘシ即チ之ヲ換言スレハ國王代議院上院ノ合意ヲ要スヘシ是李國憲法第九十九條ニ明記セル所ニシテ此議ニ付テハ恐ハ何人モ異論ヲ唱フル能ハサルヘキナリ然レトモ國王代議院上院ノ間ニ若シ必要ナル合意ヲ得ル能ハサルヲアレハ知ラス之ヲ如何スヘキヤ此時ノ處置ハ憲法未タ之ヲ定ムルモノアルヲ聞カス此場合ニシテ萬々之ナキ者ナレハ憲法會テ之カ處置ヲ定

メサルモ敢テ不都合ナシト雖既ニ實際ニ於テ此場合アルヲ免ル能ハ
ストスレハ憲法ニ之カ處置ヲ定メサルハ斷然憲法ノ缺典ト謂ハサル
ヲ得ス世或ハ憲法ヲ辨護シテ憲法ノ缺典ヲ蔽ハント欲スルモノアリ
ト雖傲々タル此大缺典ハ如何ナル巧智ヲ以テスルモ決テ蔽ヒ得ル所
ニアラサルナリ

○帝國憲法第六章附連ノ憲法問題

今茲ニ帝國憲法第六章ノ講義ヲ了ヘントスルニ當リ恰モ第一回帝國
議會ニ於テ明治二十四年度豫算ヲ討議スルノ時ニ際シテ本章ノ遂條
ニ就キ紛々問題ヲ生シ其ノ間既ニ前數回ノ講義ニ述ヘタル所ニ當ル
モノモアレト又中ニハ未ダ講述シ及ハサル所モ有レハ今簡略ニ遺漏
ヲ補修セントス

ヤ否ト云フ是レナリ。答テ曰、是レ憲法違反ニ非ス、何トナレハ議會ノ
議決ハ仮令如何ナル体裁ニ於テ之ヲ爲スモ唯々意見タルニ止マリ、實
行ノ効力ヲ有セス、而シテ憲法違反ハ實行ノ上ニ顯ハル、ノ關係ナレ
ハナリ。議會ヲシテ協贊ノ効ヲ奏セシメシカ爲ニハ仮令現行ノ法度
ニ如何ホト反對スルコトニテモ之ヲ討論シ議決スルノ權アラシメン
コトヲ要ス、若之ヲシテ常ニ現行法令ノ範圍内ニ於テノミ論議スヘキ
モノナラシメハ議會ハ曾テ憲法法律ノ改正ヲ議決スルノ機會ヲ得サ
ルヘキカ。又憲法ニ於テ議會カ憲法違反ノ議決ヲナシタル場合ノ處
分法ヲ掲ケス、解散ヲ命スルノ一事ハ政治上ノ手段ニシテ法律上一定
ノ條件ヲ設ク可キコトニ非サルナリ。ハウケ大臣責任論第七十七頁
ニ曰責任ハ國家ノ行政ニ與カルノ結果ナリ、然ルニ立憲國家ノ議會ハ
行政ニ與カルノ權ヲ缺クカ故ニ、隨テ責任ノ問題モ亦起ルマトナシト。

會テ普魯西ノ國會カ同國上等裁判所ノ判決ヲ不當ナリトスルノ議決ヲ爲シタルコトヲ述ヘタリ、其ノ他正當職權ノ外ニ於テ議決ヲ爲セル場合ハ收舉ニ違アラス。唯タ此等ノ場合ニ於テハ國家ノ他ノ機關ニ於テ之ヲ有効ノ議決ト見ルノ義務ヲ脱スルノミナリトス。

第二ノ問題ハ豫算ニ憲法違反ト云フコトアリヤ、若之レアリトセハ其ノ種類及結果ハ如何ト云フコト是レナリ。

憲法ハ豫算ニ付幾多ノ條項ヲ掲ケタリ故ニ此等ニ違反スルモノハ憲法違反ノ豫算タルコト明白ナリ而シテ前ニ衆議院ニ提出シ(憲法第六十五條)終ニ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘキ(第六十四條)ハ豫算成立ノ本然ノ二條件ニシテ其ノ一ヲ缺ク者ハ始ヨリ豫算ノ名ヲ下シ難キコト明ナリ、然ルニ此等ノ條件ハ之ヲ具ヘ既ニ衆議院ヨリ貴族院ニ移リテ議定ニ至リ貴族院議長ヨリ國務大臣ヲ經テ奏上シタル所ノモノニ就キテ

七十四

七十五

モ尙ホ正當ノ豫算タルニ缺ク可カラサル條件アリテ憲法第六章ノ數條ニ明示シタリ而シテ今此等ノ條件ヲ精査スルトキハ其中ニ二種ノ別アリ隨テ之ニ違反スルノ結果ニモ亦二種ナルコトヲ知ルナリ

第一種ハ則チ豫算ノ体裁ニ關スル條件ナリ左ノ如シ

- 一 國家一年ノ歳出歳入ノ全部ヲ含蓄スルコト(第六十四條)
- 一 豫備費ヲ設クルコト(第六十九條)

第二種ハ即チ豫算ノ議定ニ關スル條件ナリ、左ノ如シ

- 一 憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ依リ又ハ法律上政府ノ承務ニ屬スル歳出ハ政府ノ合意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除削減スルヲ得サルコト(第六十七條)
- 一 繼續費トシテ帝國議會ノ協贊ヲ求ムルノ權政府ニ存スルコト(第六十八條)

此ノ二種條件ノ差違ハ豫算ニシテ前者ノ一ヲ缺クトキハ即チ全部無効ニ歸スヘク後者ノ一ヲ缺クトキハ其ノ議事ノミ無効ニ屬スルニ在リ、

例ヘハ歳出又ハ歳入ノ一方ヲ掲ケテ他ノ一方ヲ掲ケヌ又ハ歳出若ハ歳入ノ一部分ヲ掲ケテ他ノ一部分ヲ掲ケサルモノハ憲法第六十四條ニ違反シ形式ノ上ニ於テ正當ナル豫算ト見做スヘカラス仮令之ヲ豫算ト言フモ是レ帝國憲法ノ所謂豫算ニ非ス又一會計年度ノ全体ニ涉ラス或ハ一會計年度以上ニ及ブモノニ付テモ亦然リトス、

次ニ豫備費ハ帝國憲法ニ於ケル豫算ノ組織ノ必要ナル一部分ニシテ且其ノ額ノ如キモ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補ヒ又ハ豫算外ニ生スヘキ必要ノ費目ニ充ツルニ足ルモノナラサルヘカラス但タ憲法ハ其ノ員數ヲ示定セサルヲミ即チ豫備費額ノ過不及ハ姑ク之ヲ政治上

ノ問題トシテ度外ニ措クモ豫備費ヲ以テ歳出ノ一部分ニ置カサルモノハ到底憲法ノ認メテ以テ豫算ト爲ス所ニ非サルコト明ナリ而シテ豫備費ノ疑項ヲ設ケタルニ拘ラス之ヲ空白ニシテ金員ヲ記入セサル如キハ尙ホ豫備費ヲ設ケサルニ座スルモノトス、

以上ハ即チ豫算ノ豫算タル所以ノ体裁ニ欠クヘカラサルノ要素ナリ其ノ一ヲ欠クモノヲ以テ豫算ト見做スヘカラサルハ尙ホ華族又ハ勅任セラレタル議員ヲ欠クモノヲ以テ貴族院ト見做スヘカラサルカ如シ、

然ルニ第二種ノ條件ニ至リテハ大ニ之ト異ナルモノアリ第一ニ憲法第六十七條ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出及法律ニ依リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ豫算中ニ之ヲ設ケサルモ爲ニ豫算ノ豫算タル所以ヲ害スルコトナシ例ヘハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ノ如キ

ハ全ク存セサルノ場合ヲ想像シ難キニ非ス語ヲ換ヘテ言ヘハ國債ノ
 利子及償還會社營業ノ補助及補償政府ノ民法上ノ義務又ハ諸般ノ賠
 償ノ額ハ必シモ國家ノ存立ニ欠クヘカラサルノ支出ニ非ス故ニ豫算
 上全ク此ノ類ノ支出ヲ欠クノ場合モ或ハアラン此ノ場合ニ於テ憲法
 第六十七條ノ所謂法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ナルモノハ存セス
 ト雖其ノ存セサルカ爲ニ此ノ豫算ヲ以テ豫算タル所以ニ欠ク所アル
 モノト爲スヘカラス唯タ其ノ果シテ存スル場合ニ於テ議會ハ政府ノ
 同意ナシニ之ヲ廢除削減スルノ權ナキコトヲ規定シタル人ミ是レ第
 六十七條ノ歳出ハ豫備費ト大ニ其ノ法理ヲ異ニスル以所ナリ此ノ區
 別タル豫算成立ノ上別テ最モ重大ナル關係アルモノナルカ故ニ十分
 注意ヲ加ヘサルヘカラサル所ナリ

七十八

繼續費ニ至リテモ亦然リ憲法第六十八條ニ只々特別ノ樞要ニ依リ政

七十九

府ハ豫メ繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルノ權アルコトヲ示シ
 タルノミ豫算中必スシモ繼續費ナルモノアルヘキヲ言ハス其ノ全ク
 存セサル場合ニ於テモ豫算ハ仍ホ完全ナリ政府ニ於テ或ル歳出ニ付
 繼續費トシテ協賛ヲ求メタルトキ其ノ性質ニ於テ繼續費タルヘキモ
 ノナルト否トヲ問ハス帝國議會ニ於テ政府ハ只々一年ニ向テ協賛ヲ
 求ムルノ權アルノミ數年ニ涉リ之ヲ求ムルノ權ナシト議定シタル場
 合ニ於テ始メテ憲法第六十八條ニ違反スヘシ其ノ政府ニ此ノ權アル
 ヲ否マストイヘトモ格段ナル繼續費ノ款項ヲ不可トシテ之ヲ廢除ス
 ルハ決シテ憲法違反ニ非サルナリ則チ知ル第六十七條及第六十八條
 ノ規程ハ只々議會ノ議定權ニ關スル規定ニシテ豫算ノ組織体裁ニ關
 スル規程ニ非サルコトヲ

爰ニ稍緻密ナル分析ヲ要スルモノハ皇室經費ナリ憲法第六十六條ニ

曰「皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協賛ヲ要ス」ト即チ本條ハ豫算ノ体裁ニ關スル條件ナルカ將タ又其ノ議決ニ關スル條件ナルカト問フニ右第六十六條ニ限リ兩種ノ條件ヲ合併スルモノト謂フヘシ即チ「皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ」ト云ヘルハ皇族費ノ歳出豫算中欠クヘカヲサルノ一部分ナルコトヲ規定スルモノナリ憲法ノ毎年國庫ヨリ支出スヘシト規定スルモノハ必ス豫算中ニ之ヲ掲ケサル可カラス何トナレハ凡ソ國家ノ歳出ハ盡ク之ヲ豫算ニ裁スヘキコト憲法第六十四條ノ規定スル所ナレハナリ然リ而シテ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協賛ヲ要セス」ノ一段ハ歳出ノ此ノ部分ニ對スル議會ノ議定權ニ對スル條件ナルコト明ナリ故ニ皇室經費ニ至リテハ豫算中必ス之ヲ設クヘキニ於テハ豫備費ニ類シ議會ニ

會ニ廢除削減ノ權ナキニ於テハ第六十七條ノ歳出ニ類シ而シテ政府トイヘトモ其ノ廢除削減ニ同意スルノ權ナキニ於テ第六十七條ノ歳出ヨリモ更ニ一步ヲ進メタルモノナリト謂フヘシ
 次ニ論スヘキハ憲法ノ條項ニ基ケル豫算ノ條件ニ前顯二種ノ區別アルヨリシテ其ノ成立ノ上ニ如何ナル結果ヲ及ホスヤト云フ是レナリ之ヲ要スルニ豫算ノ体裁ニ於テ欠ク所アルモノハ假令衆議院ヨリ之ヲ貴族院ニ移シ貴族院ヨリ國務大臣ヲ經テ之ヲ議定奏上スルニ至ルモ之ヲ目シテ憲法ノ所謂豫算ナリト爲スヘキニ非ス、憲法ハ(一)國家一年ノ歳出歳入ノ全部ニ涉リ(二)豫備費ヲ設ケ及(三)現在ノ定額ニ依リ皇室繼費ノ一款ヲ存スルモノヲ以テ豫算ト爲セリ、故ニ其ノ一ヲ欠クモノハ豫算ナリトスルヲ得サルコト猶ホ貴族院ヲ欠クモノハ帝國議會ニ非ス國務大臣ノ副署ヲ欠クモノハ法律ニ非サルカ如シ、故ニ此ノ場

合ニ於テハ元首ニ於テ豫算トシテ之ヲ國家ニ公示スルコトヲ得ス何トナレハ元首トイヘトモ憲法ノ條規ニ依ラサルモノニ對シ其ノ統治權ヲ行フコトヲ得サレハナリ

然ルニ豫算ノ議定ニ關スル條件ニ於テ欠クル所アルモノハ右ト全ク其ノ法理ヲ異ニス即チ此ノ場合ニ於テ無効ニ歸スルモノハ豫算其ノモノニ非スシテ此ノ條件ニ戻レル議決是レナリ例ヘハ憲法第六十七條ノ歲出ハ若始メヨリ存セサレハ則チ可ナリ苟モ存スルニ於テハ政府ノ同意ナクシテ廢除削減スルコトヲ得サルニモ拘ハラズ若帝國議會ニ於テ政府ノ同意ナシニ削減又ハ廢除ノ議決ヲ爲シタリトセンカ此ノ議決ハ憲法上議會ノ正當ナル職權ヲ以テ爲シタル議決ト認メサル所ナリ憲法ハ政府ノ同意アルモノニシテ始メテ有効ノ議決タルヲ認メタリ故ニ豫算議定案ノ奏上ニ際シ政府ニ於テ第六十七條ノ範圍

内ニ於ケル或ル款項ノ廢除削減ニ對シ同意ヲ爲サハリシコトヲ併セテ奏上スルトキハ元首ハ憲法第四條ト第六十七條トノ關係ニ因リ之ヲ以テ有効ノ議定ト看做スコトヲ得ス然リトイヘモ亦此ノ一部分ニ對スル議決ノ無効ナルカ爲ニ全体ノ豫算ヲ以テ無効ナリトスルコトヲ得ス何トナレハ豫算ノ豫算タルヘキ体式ハ完具スレハナリ前述ノ如ク憲法第六十七條ノ歲出ハ始メヨリ全ク存セストスルモ豫算ハ尙ホ豫算ナリ故ニ只タ憲法カ議會ノ議定權ニ對シ設ケタル條件ニ合ハサル議決ヲ以テ憲法上ノ議決ニ非スト看做サンノミ夫レ然リ政府ノ同意セサル廢除削減ノ議決ニシテ果シテ無効ニ屬スルトキハ憲法ノ保證ニ係ル費額ニ豫算成立スルモノトス或ハ論スル者アラン此ノ如キ議會カ廢除削減セントシタル一欸一項ニ關シ議會ノ協賛ヲ欠クノ場合ナリ故ニ全体ノ豫算ハ無効ニ屬スト答テ曰其ノ協賛ヲ欠クハ此

ノ款項ニ付キ始メヨリ何等ノ議決ヲモ爲サ、ル場合ニ在リ、既ニ議決シタルモノハ即チ議會カ既ニ其ノ協賛權ヲ行ヒタルモノナリ只々之ヲ行ヒタル結果ノ有効ナラサルノミト

但シ第六十七條中憲法上ノ大權ニ基ツケル歳出ニ關シテハ原案執行ノ文字校穩當ナラサル場合アリ、即チ前年度ノ豫算ニ於テ存セス隨テ未タ既定ニ至ラサルモノニ付テハ廢除削減ノ議決無効ニ歸シタル場合ニ於テ直ニ原案ヲ執行スルコトヲ得ス何トナレハ大權ニ基ケル歳出中政府ノ同意ナキニ於テ廢除削減ノ議決無効トナルモノハ其ノ議定ニ至レルモノ、ミニ限レハナリ。

上述ノ次第ナルヲ以テ憲法第六十七條ノ歳出中議會廢除削減ヲ議定シ政府之ニ同意セサルモノニ關シテハ法律ニ依リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ニ在リテハ直ニ原案ヲ採リ憲法上ノ大權ニ基ケル

歳出ニ在リテハ原案中既定ニ至レル部分ヲ採リ以テ豫算ヲ裁可セラ

ルヘキナリ

以上第六十七條ノ歳出ニ對スル議決ニ付キ推論スル所ハ繼續費トシテ協賛ヲ求メタル場合ニ對スル議決及現額皇室繼續費ニ對スル議決ニモ適用スヘシ即チ繼續費ヲ減廢セントセス繼續費トシテ協賛ヲ求ムルヲ不可トシテ爲シタル議決ハ無効ナリ又皇室繼續費ノ増額ヲ要スル場合ノ外其ノ現額ヲ減廢セントスルノ議決モ無効ナリ故ニ此等ノ場合ニ於テモ亦豫算ハ現在ノ定額ニ依リ成立スヘキモノトス

○裁可ト同意トノ別。豫算ニ對スル政府ノ同意ハ其ノ裁可ト同一ナリヤ否トハ頃日新聞紙面ニ屢々現ハル、所ノ問題ナルヤ其ノ差別ハ第三十八條ニ於テ天皇ト政府トノ差別ニ付キ論辨スル所トニ依リ推究スレハ自ラ明瞭ナルヘシ 抑豫算ノ裁可ハ法律ノ裁可ト全ク別物

ニシテ其ノ果シテ正式ニ合ヘル國家ノ豫算タルコトヲ公證スル所以
ナリ同意ハ政府カ責任行政ノ範圍内ニ於テ帝國議會ヲシテ憲法第六
十七條ノ歳出ニ關シ廢除削減ノ有効ナル議決ヲ爲スコトヲ得セシム
ル所以ナリ

豫算ニシテ其ノ体式ニ關スル憲法ノ條規ニ違ハサルモノハ當然之ヲ
裁可セサルヘカラス憲法ハ不裁可ノ爲ニ豫算ノ成立セサル場合ヲ豫
期セサルコト別論スル所ノ如シ然ルニ廢除削減ノ同意ニ至リテハ之
ヲ爲スモ爲サ、ルモ全ク政府ノ權内ニ在リ

裁可ハ公證スヘキモノヲ公證スルノ義ナルヲ以テ責任ナク假令事實
ニ於テ公式ヲ缺クコトヲ後ニ至リ發見スルモ元首ノ一旦公證シタル
所ハ永ク國家ノ標準タルヘク之ヲ取消スノ道ナシ只タ陛下左右ノ官
司ニ於テ規諫ノ責ニ任スヘキノミ之ニ反シテ政府ノ表シタル同意ニ

對シテハ政府其ノ責ニ任セサル可カラズ即チ廢除削減ノ爲ニ大權ノ
施行ヲ障グルコトナク又法律ノ結果タル支出ヲ爲シ政府財政上ノ義
務ヲ全クスルニ於テ欲ク所ナキノ責ニ任セサルヘカラス裁可ト同意
トノ差別略ホスノ如シ。

第七章 補則

此ノ一章ハ此ノ憲法ニ規定シタル權利義務ノ關係ノ未タ有ラサル時
ヨリ既ニ有ルノ時ニ移ル次第及其ノ他日稍異ナル關係ニ移ラントス
ルニ及テ必要ナル條件ヲ確定ス

第七十三條 將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要
アルキハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ
此ノ場合ニ於テ兩議員ハ各其ノ惣員三分ノ二以上
出席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席議

員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

此ノ一條ハ憲法改正ニ關スル議案提出ノ權ヲ天皇ノ特有ニ歸スルモノニシテ、政府及帝國議會ハ改正ノ必要ヲ見ハ之ヲ上奏スルコトヲ得ルモ、自ラ案ヲ立ツルコトヲ得サルナリ。其ノ字句ヲ密ニ分折セハ左ノ要件ヲ得ヘシ。(聖勅ノ解説ヲ對照スヘシ)

(一)改正ハ必ス十分ノ必要アル時ニ於テスヘキ事

(二)改正ノ案ハ元首ノ發議ニ限ルヘキ事

(三)改正ノ案ヲ決スルハ必ス立法ノ手續キニ因ルヘキ事(裏面ヨリ之ヲ言ヘハ帝國議會ノ協賛ヲ經スシテ改正セサルヘキ事)

(四)改正ノ案ニ用ヰル立法ノ手續ハ出席、可決トモニ三分ノ二以上ノ多數ヲ要スル事、

(五)或ル條項ヲ改正スルコトヲ得ヘク、憲法全体ヲ廢棄變更スル能ハサル事是レナリ。

方今ノ學說ハ憲法ヲ容易ニ變更スルノ不可ナル論ヲ俟タスト雖亦國家ノ性質ニ於テ永ク之ヲ一樣ニシテ變更ナカラシムルハ到底難ク、且ツ何如ハカリ嚴重ナル條項ヲ以テ變更ヲ防キオクモ眞ニ變更ヲ要スルノ日至ルトキハ更ニ用ヲ爲スモノニ非スト云フニ歸着セリ。シユルチエ曰變更ヲ難クスルハ條項ハ實効ナキノミナラス却テ弊害アリ、即チ平時ニ在テハ之カ爲ニ有益ニシテ而モ必要ナル改正ヲ障止シ政治激動ノ時若クハ革命ノ時ニ在テハイカニ嚴重ナル規程モ一撃ノ下ニ効力ヲ失ヘリ。夫ノ佛國憲法ノ凡ソ用ヰ得可キ嚴重ノ語ハ悉ク之ヲ用ヰテ變更ヲ禁シタルニモ拘ハラヌ千七百九十一年以來果シテ幾度變更シタルヤヲ知ラス之ニ反シテ英國ニ於テハ成文スラ無キニモ

拘ラス憲法ノ實ハ數百年ヲ經ルモ確固トシテ動カス而モ時ニ新規ノ條項ヲ加ヘ、時運ニ從テ啓發スルコト最モ自由ナリ、憲法ト通常法律トノ差違ハ英國ノ知ラサル所ナリト。

又之ヲ各國ノ憲法ニ參照スルニ大抵改正ノ道ヲ設ケサルモノナシ、左ノ如シ。

婆典 第六十五條 憲法ヲ補足シ或ハ之ヲ解釋シ或ハ之ヲ改正スルヲ目的トスル法律案ハ各議院ニ於テ出席議員三分ノ二ノ同意ヲ得サルヘカラス

巴威里 第十章第七條 憲法ハ國會ノ承諾ナクシテ修正増補スルヲ得ス、修正増補ノ議案ハ國王獨リ之ヲ提出シ國會ハ其ノ提出ノ議案ニ就テ議事ヲ行フ、其ノ議決ハ各院ノ議員四分ノ三以上ノ出席アリテ三分ノ二以上ノ多數アルヲ要ス。

白耳義 第三百三十一條 立法權ハ憲法某々ノ條ノ改正ヲ宣告スヘシ、此宣告ノ後兩議院ハ當然ニ解散ス、更ニ第七十一條ニ從ヒ新ニ兩議院ヲ招集ス、新徴ノ兩議院ハ王ト協同シテ改正ノ條件ヲ議定ス、此ノ場合ニ於テハ各院ヲ組織スル議員少クトモ三分ノ二出席セサル時ハ議事ヲ開クヲ得ス而シテ某ノ投票少クトモ三分ノ二以上ニ充タサレハ改正ヲ承認スルヲ得ス

荷蘭 第九十六條 根本法修正ノ議案ハ明ニ修正ノ條々ヲ示ス法律ハ其ノ議案ヲ審議スヘキ旨ヲ宣告ス

全 第九十七條 此ノ法律ノ公告ノ後兩議院ハ解散ス、新撰ノ兩議院ハ此ノ議案ヲ議シ議員三分ノ二以上ノ投票ヲ以テ此ノ法律ノ提出シタル修正ヲ承認スルヲ得ヘシ

全 第九十九條 王及國會ノ決定シタル根本法修正ノ個條ハ公

式ニ從テ發布シ根本法ニ合併スヘシ
 普魯西 第一百七條 憲法ハ法律ヲ制定スル通常ノ方法ヲ以テ修正ス
 ルヲ得ヘシ但シ少クトモ二十一日ノ時間ヲ要スル兩度ノ投票ニ於
 テ過半ノ多數アルヲ要ス
 丁抹 第九十五條 現在ノ憲法ニ入ルヘキ増補及改正ノ個條ニ關ル
 議案ハ國會ノ通常會若クハ臨時會ニ提出スルヲ得ヘシ根本法ノ新
 條ニ關ル議案兩議院ノ認定スル所トナリテ政府ヨリ効力ヲ與ヘン
 ト欲スル時ハ國會ヲ解散シ更ニ兩院ノ爲ニ議員ヲ撰擧スヘシ新徵
 ノ國會ノ通常會又ハ臨時會ニ於テ變改ナク再タヒ承認シ王之ヲ裁
 可シタルトキハ其ノ條ハ憲法ノ効力ヲ得ヘシ
 北米合衆國 第五章 國會ハ兩院議員三分ノ二以上憲法ノ修正ヲ必
 要ナリトスル時又ハ各州立法府ノ三分ノ二ヨリ請求スルトキハ民

會ヲ招集シテ修正ノ議案ヲ廢スヘシ此ノ議案ハ國會ノ定ムル所ノ
 程式ニ從ヒ各州ノ立法府ノ四分ノ三或ハ其ノ各州立法府ヨリ出タ
 ル民會ノ四分ノ三以上ノ批准ヲ得タル時ハ法律タルノ効力ヲ有シ
 憲法ノ一部トナルヘシ但シ千八百〇八年ノ前ニ爲シタル修正ハ何
 等ノ方法ニ於テモ第一章第九條ノ第一項及第四項ヲ變スルコトナ
 ク而シテ一州モ其ノ承認ナクシテ上院ニ於テ投票ノ平等ヲ奪ハ
 ルコトナシ
 憲法改正ニ關スル問題ニアリ其ノ第一ハ憲法ニ違反スルニモ拘ラス
 議會之ニ協賛シ天皇之ヲ裁可シテ公布シタル場合ハ如何ト云フ是レ
 ナリ。此ノ問題ニ對スル現今國法學上ノ答辯ニ曰憲法違反ニ法律タ
 リトモ普通ノ手續ヲ以テ之ヲ議決シ元首之ヲ裁可シタル場合ニ於テ
 ハ其ノ法律タルノ効力ハ完全ナリ故ニ米國ニ於テノ如ク憲法ニ反對

ノ明文アルニ非サルヨリハ裁判官モ之ヲ適用セサルヲ得ス其ノ他ノ官吏ニ至リテモ皆之ニ遵由スルノ義務アリ且夫レ裁可ハ元首ノ大權ニシテ元首ハ神聖侵スヘカラサルニ依リ憲法違反ノ法律ヲ裁可シタルモ其ノ責ニ任セス國務大臣ハ法律遵奉ノ責ニ任セシムヘキモ法律制定ノ責ニ任セシムルコトヲ得サルナリ故ニ憲法違反ノ此ノ道ニ依テ事實トナレル場合アルモ恢復ノ道ナキハ國法ノ尙ホ未タ十分ニ進歩セサルノ一点ナリトス。

エリテ法律命令論^{第二百六十三頁}ニ曰形式上ノ憲法ニ於テ設ケタル立法ノ制限ハ絶對的ナラサルヲ通例トス。即チ難澁ナル形式ヲ守ルニ於テハ如何ナル憲法上ノ規程ト雖之ヲ廢止變更中止スヘク又格段ナル一個ノ場合ニ向テ其ノ効力ヲ停止スヘク又先ツ憲法中ノ條項ヲ廢止セスシテ特別ノ法律ヲ以テ其ノ効力ヲ減スルコトヲ得ヘシ。

論者多ク反對ノ見解ヲ取ルト雖形式上ノ憲法ヲ有スル各國ノ議院ノ慣例ハ果シテ法律ヲ以テ憲法ノ効力ヲ減スルコトヲ許セリ。且多クノ國家ニ於テハ憲法改正ノ形式ヲ守ラスシテ制定セラレタル法律ニモ形式上自餘ノ法律ト同一ノ効力アリトセサルヲ得ス即チ裁判官ニ於テ法律ノ憲法ニ準合スルト否ト審査スルノ權ナキ諸國ニ於テハ皆斯クノ如シ。

同書第四百〇五頁ニ又曰今若裁判官ノ法例審査權ヲ以テ法律ノ實體上及形式上ニ於テ憲法ニ準合スルト否トヲ判別セシムルニ足ラストセハ遂ニ立法上ノ政略ニ關シ起ル所ノ問題ハ少クトモ形式上ニ於テ各般ノ法律ヲシテ憲法ニ準合セシムル爲特別ノ設營ヲ定ムヘキヤ否ト云フ是レナリ例ヘハ法律公布ノ前ニ於テ其ノ体裁ヲ精査スルノ權力ヲ具ヘタル機關ヲ置クモ其ノ一方ナルヘシ。今其ノ方法ヲ論究ス

ルハ本論ノ範圍外ナリト雖茲ニ一言スヘキハ他ナシ立權國家ニ於テト雖憲法ヲ變更スルノ法律タリナカラ規定ノ難澁條件ヲ守ラスシテ裁可公布セラレ或ハ議會ノ議決セサル法律ノ原文タリナガラ法律トシテ發布セラレ或ハ發布ノ際印刷ヲ誤ル如キハ屢起ル場合ニシテ面カモ其ノ責ニ任スル者アラサルナリ。

凡ソ斯クノ如ク故造ノ惡意ナク寧ロ錯誤ニ依テ起ル所ノ法律ノ憲法違反ニ對シテハ各國現行ノ法度ニ於テ十分ナル防扞ノ策ヲ欠ケリ而シテ關係ノ機關ニ於テ恢復ノ手段ヲ爲サ、ル以上ハ憲法ニ違反シテ成立シタル法律タリトモ其ノ形式上并ニ實體上ノ効力ニ於テ憲法ニ準合スルノ法律ト敢テ異ナル所ナシ。故ニ將來法律ノ制定ヲシテ憲法ニ準合セシムル所以ノ形式上ノ條件タル權義準則ヲシテ一層有効ナル担保ヲ得セシメナガラ爲ニ弊害ヲ招クコト莫ラント欲セハ則チ

如何シスヘキト云フハ十分考量ヲ要スルノ問題ナリ而シテ今裁判官ノ審査權ヲ強クスルトキハ必ス弊害ノ之ニ隨テ生スヘキハ疑ヲ容レサルナリ。

憲法改正ニ關ル第二ノ問題ハ憲法附屬ノ法律ノ改正ニ關シ即チ憲法附屬ノ法律ハ一般法律ニ比シテ國家根本ノ編成ニ關係スルコト更ニ密接ナリ故ニ其ノ改正モ亦一般法律ノ改正ト異ナルノ手續ニ依ルテ相當トスルニ似タリ是ヲ以テ外國ニ於テハ往々明文ヲ以テ其ノ改正ヲ難澁ニシタリ。

○巴威里千八百二十八年三月九日議院法第三條ニ曰此ノ法律ハ本邦根本法ノ一トシテ且憲法ヲ增補スルノ法章トシテ見做サルヘシ。此ノ法律ハ官報ニ公布ノ日ヨリ効力ヲ有シ憲法第十章第七條ニ規定シタル法式ヲ以テスルニ非サレハ變更スルコトヲ得ヌ。

○同國千八百三十四年七月一日永久王室經費ニ關スル法律第九條ニ
 曰「此ノ法律ハ本邦ノ根本法ノ一トシテ見做サルヘク其ノ効力ハ此ノ
 法律ノ各條項ヲ以テ憲法ノ本文ニ加ヘタル場合ト同一ナルヘシ」。

○同國千八百四十八年六月四日大臣責任法第十四條ニ曰「此ノ法律ハ
 官報ニ公布ノ日ヨリ有効ナルヘク憲法ノ増補トシテ且本邦ノ根本法
 トシテ見做サルヘク憲法第十章第七條ニ規定シタル形式ヲ以テスル
 ニ非サレハ變更セサルヘシ」。

○巴丁憲法第六十四條ニ曰「凡ソ憲法ヲ増補シ解釋シ變更スルノ法律
 ハ議會ノ兩院ニ於テ出席員三分ノ二ノ同意ヲ經ルニ非サレハ議決ス
 ルヲ得スト」

而シテ同國千八百七十九年二月十四日裁判官權利關係法第十九條ニ
 曰「此ノ法律ハ憲法及千八百十九年一月三十日ノ官吏法ノ一部分ヲ爲

シ司法大臣ニ於テ其ノ執行ノ責ニ任スト

○ヘツセン憲法第一百條ニ曰「憲法ノ變更及解釋ハ必ス兩院ノ一致ヲ
 以テ之ヲ行フヘク下院ニ於テハ少クトモ二十六人ノ同意ヲ要シ上院
 ニ於テハ少クトモ十二人ノ同意ヲ要ス云々ト

而シテ同國千八百六十二年七月十五日ノ保安法第二條ニ曰「本法第一
 條ハ憲法ノ一部分ヲ爲スモノトス

又同國千八百七十二年十一月八日議院及撰舉法第五十一條ニ曰「第一
 條乃至第十七條第十九條第三十三條第四十五條第四十七條乃至第四
 十九條ノ規程ハ之ヲ憲法ノ一部分ト看做ス

ブロンシワイヒ千八百五十一年十一月二十二日議院法第二十八條第
 二項ニ曰「本法ノ規定ハ國家根本法ノ一部分ヲ爲シ國家根本法ト同一
 ノ手續ヲ以テ公然解釋シ變更シ又ハ廢止セラルヘキモノトス

然ルニ歐洲二三ノ邦國並ニ本邦ニ於テハ普通法律ト憲法附屬法律トノ差別判然ナラス隨テ其ノ改正ノ手續モ亦一定セス。憲法制定以來今日ニ至ルマテノ事實ヲ以テ之ヲ論スレハ「憲法及憲法附屬ノ法律」ナル語ハ既ニ樞密院官制第六條ニ於テ之ヲ用ヰタリ故ニ本邦ノ國法上ニ於テ既ニ其ノ範圍一定セルモノト看做サ、ルヲ得ス。暫ク現在ノ解釋法ニ依レハ憲法ト同時ニ發布セラタレル諸法律勅令即チ議院法貴族院令、衆議院議員選舉法、及會計法ヲ以テ憲法附屬ノ法律勅令ト稱セシムルモノ、如シ。然レトモ發布ノ同時ハ必シモ憲法附屬ノ法令タルト否トヲ判別スル所以ニ非サルニ似タリ。此ノ差別ハ寧ロ之ヲ憲法ノ條項ニ求ムヘキニ似タリ。憲法ノ條項ヨリ見レハ帝國議會ニ關シテ議院法ノ重キヲ認ム貴族院ニ關シテ貴族院ノ重キヲ認ム衆議院ニ關シテ選舉法ノ重キヲ認ムルト同様ニ樞密院ニ關シテハ樞密院

官制ヲ重キニ置キ會計検査院ニ關シテハ會計検査院法ヲ重キニ置クヘキニ似タリ而シテ會計法ニ至リテハ憲法ハ曾テ之ヲ認メサルナリ。故ニ憲法ノ規程ヲ以テ標準トスルトキハ少クトモ樞密院官制ハ之ヲ憲法附屬ノ勅令ト看做シ會計法ハ之ヲ普通ノ法律ト看做スヘキニ似タリ。

次ニ憲法附屬ノ法律勅令ヲ改正スルノ手續ニ至リテハ本邦ニ於テ特別ノ規程ヲ設ケス憲法第七十三條ハ只將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキトノミ云ヘテ外國ノ憲法ニ於テノ如ク解釋増補ノ場合ヲ云ハス故ニ現今ノ成法ニ於テハ所謂難澁規程ナルモノハ附屬法令ノ改正増補ニ及ハスト謂ハサルヲ得ス。

憲法改正ノ手續ヲ附屬法令ノ改正ニ及ホサルハ想フニ是レ七十六條ノ外如何ナル法律ト雖之ヲ憲法ト認メサルノ主義ナルヘシ然レト

モ此ノ主義ノ果シテ國家ノ性質ニ適ヒ敢テ間然スヘキナキヤ否ハ尙
 ホ討究ヲ尽スノ後ニ非サレハ定知シ難シ。國法學者多數ノ論ニ依レ
 ハ憲法ノ名目ヲ以テ制定セラレタルモノ、ミ必シモ憲法ナルニ非ス
 凡ソ權義準則ノ憲法タルト否トハ國家編成ノ根本ニ關係スルト否ト
 ヲ以テ之ヲ判別スヘシ即チ明ニ憲法ノ名ヲ以テ制定セラレタルモノ
 即チ形式上憲法タルモノ、外別ニ實體上ノ憲法ナルモノ在リテ存ス
 而シテ就中國務大臣ノ責任ヲ論スルノ學者ハ憲法違反ト云フ中ニ形
 式上ノ憲法ニ對スル違反ノミナラス實體上ノ憲法ニ對スルモノヲモ
 含蓄セシメントス。

○エリチツク法律命令論^{第二百六十二頁}ニ曰通例ノ立法事業ノ爲ニ設ケタル
 規程ハ或ル類ノ法律ヲ消滅セシムルノ効力ヲ有セス。此ノ制限ハ通
 例國憲法ヘルフワスングスゲゼツニ於テ之ヲ設ケタリ。國憲法ノ

本義ハ二重ナリ即チ實體上ノ國憲法并ニ形式上ノ國憲法ナルモノア
 リ。實體上ノ國憲法トハ國家根本ノ編成ヲ定メ及國家直接ノ機關ノ
 權限ヲ制スルモノ是レナリ。此ノ意味ニテ言ヘハ凡ソ國家ハ成文ノ
 憲法ヲ存スルト否トニ拘ラス又一部分ハ之ヲ法章ニ編成シタルト否
 トニ拘ラス必ス國憲法(密ニ言ヘハ國憲的權義典則ナルモノアリ)。
 之ニ反シテ形式上ノ意味ニテ言ヘハ其ノ變更ニ關シ難澁ノ法式ヲ以
 テセンコトヲ要スルモノ、ミニ限レリ即チラバンドノ適當ナル語法
 ナ以テ之ヲ言ヘハ高度ナル形式上ノ法力ヲ有スルモノ、ミニ限レリ。
 此ノ意味ニテ言ヘハ英國ハ未ダ曾テ憲法ヲ有セサルナリ。

第七十四條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ル
 ナ要セス。

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得

ス。

學者ノ論ニ曰、君主ノ家憲ニハ其ノ家族法及相續法ヲ掲ケタリ、而シテ此ノ二法ハ私法ニ屬スルヲ例トスル点ヨリ見レハ君主家法ノ此ノ部分ハ私法ニ屬スルコト明ナリ、故ニ之ヲ實際ニ適用スルニ當テハ往々私法ノ原則ヲ以テ之ヲ補充セサル可カラズ、然レトモ又他ノ一方ヨリ觀ルトキハ君主家法ハ國法ニ屬スルモノトス、何トナレハ君主家法ハ國家ニ勢力ヲ及ホシ政治ニ關係ヲ有スルモノナレハナリ、故ニ又之ヲ國法中ニ論列スルヲ常トス、君主家法ニ此ノ兩様ノ性質アルハ世襲君主國ノ本質ニシテ國家統治權ノ主格ト相續法ノ如キ私法上ノ原則トヲ混和シテ一体ト爲シタルモノナリト

斯ク我カ帝國ノ君主家法、即チ皇室典範ハ一方ヨリ見レハ國法ニ屬シ、憲法ノ一部ヲ爲スト雖、其ノ改正ハ前條ニ述ヘタル憲法改正ノ手續ヲ

七十二

七十三

以テ改正スヘキ限ニ在ラス、何トナレハ典範ハ君位ニ關係スルヲ以テ憲法ニ之ヲ引用スト雖、亦一方ヨリ見レハ是レ君家ノ私法ニシテ君家獨立ノ制作ニ屬シ臣民ノ公議ニ付スヘキニ非サレハナリ。皇室典範ノ條項ノ改正増補ハ其ノ第六十二條ニ依リ將來必要ナルニ當テ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シテ勅定セラルヘキ所トス、即チ天皇ニ於テ皇族ノ家長タル權利ヲ以テ之ヲ獨決シ玉ヘルモノニシテ皇族會議ト樞密顧問トハ唯々意見ヲ上奏スルノミ確決ノ權アルニ非サルナリ。然リト雖國家モ亦獨立ノ編制アリテ一定ノ手續ヲ經ルニ非サレハ變更ス可カラサルモノタルヘシ然ラサレハ憲法ノ擔保ハ此ノ一点ヨリ破レテ君主隨意ニ國憲ヲ動カスノ道ヲ開クヲ以テ、皇室典範ノ改正ノ爲ニ憲法ノ條項ヲ變更スルコトヲ得サラシメタリ。

憲法ト典範トノ關係ハ斯ク兩々相侵サ、ルニ在リテ甚々灼然ナリト

雖、更ニ精密ナル講究ヲ要スルモノハ、則チ典範ト法律トノ關係ナリ。典範ハ皇族ノ相續ニ關シ規程ヲ設ケタリ、然レトモ民法中ニモ既ニ相續上ノ規程アリ。典範ハ皇族ヲ勾引シ又ハ之ヲ裁判所ニ召換スルニ勅許ヲ必要トセリ、然ルニ是ノ如キハ普通訴訟法ニ對スルノ變例ナリ。典範ハ世傳御料ト定メラレタル土地物件ノ分割讓與ス可カラサルヲ規定セリ、是レ國家公益ノ爲ニ土地ヲ分割セシムルノ法律例ヘハ公用土地收用法ニ對スル變例ナリ。又凡ソ國家ノ臣民ハ國家ニ對シ兵役ト納稅トノ義務ヲ盡スヘク、至尊ヲ除クノ外皇族トイヘトモ皆臣民ナリ、而シテ現ニ各國ニ於テ皇族ハ此等ノ義務ヲ特免セラル、ノ場合多シ。其ノ他皇室典範ノ旨趣ヲ貫徹セシメントスルトキハ、則チ國家ノ法律ニ違ハンコトヲ要スル場合多々アリ、此等ハ則チ如何シテ可ナラント云フコト一ノ問題ナリ。

皇室典範ハ皇族ノ家法ナリ、而シテ普通ノ家法ハ以テ國家ノ法律ニ對スルノ變例ヲ設クルコトヲ得ス、例ヘハ華族ノ其家ノ家法ニ於ケル相續ノ規程ノ如キハ決シテ民法ノ相續篇ノ條項ニ違背スルコトヲ得サルモノナリ、然リト雖皇族ノ家法タル典範ハ此ノ点ニ於テ普通ノ家法ト相同シカラサル所以ノモノニアリ、即チ天皇ハ臣民ニ非サルト典範ハ一方ヨリ見レハ憲法ノ附屬部分ナルト是レナリ。

第一ニ天皇及皇后ハ國ノ元首ニシテ其ノ臣民ニ非ス、隨テ臣民ノ權利義務ヲ規定スルノ法律ハ一モ元首ニ及フコトナシ。民法ノ如キモ元首ハ之ヲ裁可シタルニ止マリ、自ラ之ニ遵由センコトヲ誓ヘルニ非ス、故ニ相續財産等ノ規程ハ一モ元首ノ元首トシテノ相續及資財ニ及フコトナシ、即チ皇位繼承、神器相傳、及世傳御料ノ事ノ全ク普通法律ノ外ニ在ルハ此ノ故ナリ。夫ノ神器ハ元首寶祚ノ標章ニシテ一人ノ所有

ニ非ス、從テ所有法ノ及ハサル所ナリ。又夫ノ世傳御料ハ天皇ノ位ニ
附屬スルモノナルヲ以テ一般税法ノ及ブ所ニ非ス又國家ノ公益ニ關
スル法律ヲ以テ之ニ加ヘ難シ、何トナレハ此ノ法律ハ臣民ニシテ始メ
テ恪守ノ義務アル所ナレハナリ。但シ天皇ノ所有ト雖其ノ御位ニ屬
セサルモノ、即チ御私有トシテ所領アラセラル、所ハ國家一般ノ法律
ニ從ハサルヲ得ス即チ普通帝室御料ハ税法并ニ土地收用ノ法ヲ適用
スルナリ。

第二ニ皇室典範ハ憲法ニ引用シタルノ故ヲ以テ一ノ公法ナリ、例ヘハ
貴族院令樞密院官制ノ如シ是ヲ以テ其ノ條項ヲ爲セルモノハ悉ク法
律ヲ變更スルノ効力ヲ有セリ。然レトモ典範ハ未タ公布セラレタル
モノニ非ス而シテ有司及臣民ノ遵由ノ義務ハ公布ニ依リ始メテ生ス
ルカ故ニ、典範ニ含蓄スル所ノ訴訟法ノ變例ノ如キハ裁判官及人民ニ

於テ遵由ノ義務ナシト謂ハサル可カラス。是ヲ以テ典範ノ條項ハ元
來尋常法律ヲ打消スノ効力アルニモ拘ラス、更ニ其ノ變例ニ屬スル條
項ヲ普通法律ノ一部トシテ公布スルノ必要ヲ生スルナリ、例ヘハ典範
ノ第五十條ニ

〔人民ヨリ皇族ニ對スル民事ノ訴訟ハ東京控訴院ニ於テ之ヲ裁判ス
但シ皇族ハ代人ヲ以テ訴訟ニ當ラシメ自ラ訟廷ニ出ルヲ要セス〕
トアルヲ重テテ裁判所構成法ノ第三十八條ニ

〔皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院
ニ屬ス但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ
適用ス〕

トアリ又民事訴訟法第二百九十六條ニ

皇族証人トナルトキハ受命判事又ハ受託判事其ノ所在ニ就キ訊問

ヲ爲ス〔刑事訴訟法第三百三十條參觀〕

トアルカ如シ。然ルニ典範第五十一條ニ

「皇族ハ勅許ヲ得ルニ非サレハ勾引シ又ハ裁判所ニ召喚スルコトヲ得ス」

トアルコ新刑事訴訟法ニハ之ニ對スルノ一條ナシ是レ法律ノ闕点ナリトス。

次ニ皇室典範ニシテ果シテ普通法律ヲ打消スノ効力アルモノナランニハ何故ニ責任大臣ニ於テ之ニ連署セサルヤノ問題ヲ講究セサル可カラス。之ヲ一言セハ典範ハ元首ノ國家ニ對スル立法權ヨリ發スルモノニ非スシテ其ノ室家ニ對スル家長權ヨリ出ツルモノナリ而シテ大臣ハ國家ノ機關ナルノミ元首ノ室家ニ關係セス是レ國法上大臣ヲシテ典範ニ副署セシメサル所以ナリ。典範ニシテ國法上ノ關係ニ於

テ政府人民ニ義務ヲ負擔セシムルコトアルモ之カ爲ニ上陳ノ意義ヲ變スルコトナシ是レ國王ニ於テ國家ト王家トヲ連絡スルノ必要ヨリ生スルモノニシテ王家ハ家族法ヲ制定スルニ由リ同時ニ國法ハ一部ヲ制定スルニ過キス。且夫レ典範ヲ定ムルハ皇族首長ノ特權ニシテ唯タ憲法ヲ變更スルコト能ハス若之ヲ變更セハ則チ其ノ効力ヲ生セサルノミ其ノ他ニ於テ如何ナル條項ヲ立ツルモ隨意ナリ從テ國法ニ對スル責任ヲ生セサルハ是レ事實ニ於テ副署ヲ要セサル所以ナリ。特ニ憲法ノ一條ヲ以テ皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條項ヲ變更スルコトヲ得ス」ト云ヘル以上ハ萬一憲法ニ遠背セルノ條項ヲ制定スルニ至ルモ國家及臣民ハ之カ爲ニ拘束ヲ負フコトナク其ノ規程ヲ實施スルノ道ナシ從テ責任ノ實ヲ生セサルナリ。外國ニ於テ君主家法ヲ公布スルトキ諸大臣又ハ一大臣之ニ連署スルハ事務上ノ効力又ハ政略上

ノ効力アルノミ國法上ノ効力アルニ非ス。普魯西ニ於テハ王家ノ事
ハ一モ政務ト看做サ、ルカ故ニ憲法上ノ事務執行ニ係ル原則ヲ一モ
之ニ適用セサルハ近時國法ノ模範トスル所ナリ。

第七十五條 憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ 變更スルコトヲ得ズ

攝政ノ權限如何ハ國々ノ慣例ニ依ルコトニシテ國權上必スシモ一定
ノ規模アルニ非ス、普魯西ニテハ本條ノ如キ明文無キヲ以テ尋常ノ手
續キヲ經テ憲法ヲ改正スルモ亦其ノ權内ナリト云ヘリ、シユルチエ所
說之ニ反シテウルデンブルヒ憲法第十五條ニ於テハ憲法ノ條項ヲ變
更スル攝政ノ處分ハ唯々其ノ在職ノ間ノミ有効ナルモノトシ、又授爵
ノ權ヲ制限シ、樞密顧問ヲ免職スルヲ得サラシム。

ポルンハツクニ依レハ 普國々法論第一卷第百九十六條 攝政ハ國家ニ元首ナキノ時ナ

カラシメンカ爲ニ設ク所ナリ、サレハ凡ソ統治者ニ屬スル各般ノ權利
ハ皆攝政ニ於テ之ヲ行フヘキモノトス、何トナレハ攝政ヲ置クノ間眞
ノ統治者 即チ幼主又ハ重忠ノ君主 ハカ自ラ行フヘキノ權利トテハ一モ留存セサレ
バナリ、即チ現時ニ於ケル國家ノ觀念ニ適合スルモノハ斯ク攝政ヲシ
テ各種各般ノ權利ヲ行ハシムルニ在リトス、獨乙ノ或ル諸邦ノ憲法ニ
於テ攝政ヲシテ統治權ノ或ルモノヲ行フコトヲ得サラシメ、眞ノ統治
者モ亦之ヲ行フコト能ハサルカ故ニ一時此等ノ權利ヲ止息セシムル
ニ至ルモノハ民事上後見人ノ想念ノ混入スルニ因ルト。

攝政ヲ置クノ間憲法ヲ改正セサルノ理由ハ既ニ第十七條ニ於テ述ヘ
タリ、
攝政ヲシテ皇室典範ヲ變更セシメサルヲハ實ハ皇室典範ニ屬スルヲ
ナレト、之ヲ此ニ載スル所以ノモノハ、要スルニ攝政ハ元首ノ國法上ノ

代理者ナリ、從テ國家ノ公權上ヨリ設クル所ニシテ天皇ニ代テ其ノ國ノ元首トシテノ權力ヲ使行スルニ止マリ、其ノ皇族ノ家長權ニ至リテハ之ヲ代表スルモノニ非サレハナリ、皇室典範ハ特ニ皇族ノ爲ニ布ク所ニシテ皇族部内ヨリ觀レハ私權上ノ規程ニ屬スルモノ多ケレハ、公權上ノ代理者ノ處理スヘキ限ニ在ラサルナリ、此ノ次第ハ亦第十七條ニ攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フトアルニテ明白ナリ。

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用井タルニ拘ラス此ノ憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ統テ遵由ノ効力ヲ有ス。

歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル。

○法律規則命令云云ハ幕府ノ禁令ヲ除キ維新以來憲法有効ノ時ニ至

ルマテノ間ニ於テ正當ノ公權ヨリ發シタル一切ノ制令ヲ云フ、即チ其ノ之ヲ發シタル所ノ官司ノ如何ヲ問ハス又其ノ關スル所ノ事件ノ如何ヲ問ハス、唯タ正當ノ職權ヨリ出テ、憲法實施ノ時ニ至ルマテ有効ナリシヲ以テ標準トスヘキナリ。

法律勅令ノ名稱ハ十九年二月二十六日ノ公文式ニ始マルト雖、是レ唯立憲制ノ豫修ヲ爲シタルニ止マリ、義解ニモ謂ヘル如ク、何ヲカ法律トシ何ヲカ勅令トスルニ至テハ未タ一定ノ限界アルニ非ス、且國法上ノ理由ヨリスルモ法律勅令ノ限界ハ立法議會ノ開設以後ニ非サレハ生スルコト能ハサルモノナリ。其ノ故ハ凡ソ事件ノ性質ニ依リ法律タルヘキモノト命令タルヘキモノトヲ區別セントスルノ企ハ各邦ノ實驗ニ於テ奏功セス、唯タ議會ノ協賛同意ヲ經テ制定セラレタリト云フ外形上ノ標識ヲ以テ法律ノ法律タルコトヲ知ルノ外ナケレハナリ。

セリグマン法律篇ノ開卷第一ニ曰「憲法ヲ以テ新ニ國家生活ノ官能ヲ編成シタルノ前ニ於テ君主國家ノ無制限立法者タリ並ニ行政者タリシ時ニ在テハ法律トハ一般ニ權義規程ヲ設定スルモノ是レナリキ、即チ一定ノ事變、行爲及不行爲ヲシテ法上ノ事實タラシムル所以ノモノタル國家抽象ノ意志ノ拘束的宣告ヲ指シタリ、而シテ憲法一タヒ出テ、立法ノ經路ヲ轉更シ、新機關トシテ議會ヲ設ケテヨリ以來、獨リ權義規程ヲ設定スルモノ、ミナラス、總ヘテ適當ノ機關ヨリ出テ、憲法ニ定メラレタル体式ヲ以テ爲サレタル國家ノ宣告ヲ包含スルニ至リ、又其ノ含蓄スル所ノ條項ノ如何ニ關係セサルナリ」ト。

○此ハ、憲法ニ矛盾セサルト云フニ就キテハ精確ナル意義ヲ定ムルコト必要ナリ。矛盾ニ事件ノ矛盾ト法文ノ矛盾トアリ。例ヘハ憲法ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住移轉ノ自由ヲ認メタルニ保安條例ニ於テ申

達ヲ以テ人ヲ退居セシムルノ權ヲ行政官ニ屬セシメタルハ是レ事實ノ矛盾ナリ、然レモ法文ノ矛盾ニ非ス、今若正面ニ「行政官ハ命令ヲ以テ居住移轉ノ自由ヲ制限スルコトヲ得」ト云フカ如キ一條ヲ制定シタリトセンカ、是レ法文トシテ既ニ矛盾セルモノナリ。今若「國家毎年ノ歳出歳入ノ豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要セス」ト一般ニ規定セハ是レ法文ノ矛盾ナリ、之ニ反シテ或ル特別ノ歳出又ハ歳入ノ款項ヲ舉ケテ之ヲ豫算ニ載スルモ年々協贊ヲ經ルヲ要セサルモノト、スルハ唯タ事實ノ違反ナルノミ、法制上ノ違反ニ非ス。サテ本條ニ於テ矛盾ト云フニ當リテハ此ノ二種ノ矛盾ノ孰レヲ指スヤト云フコト一ノ問題ナリ、而シテ廿四年一月ニ於ケル保安條例ノ執行ハ事實ニ於テ此ノ問題ヲ釋定シタリ、即チ其ノ第四條ハ意味精神ニ於テ憲法第二十二條ニ矛盾スルニモ拘ラス衆議院ノ故サテ其ノ廢止ヲ議決シ、此ノ議決ノ

實効ヲ見サル前ニ政府同條例ヲ執行シテ議會モ敢テ其ノ違憲ヲ咎メザルハ是レ事實ニ於テ同條ヲ以テ仍ホ有効ナリト認メタルモノナリ。且眞ノ法理ヨリスルモ此ノ釋定ヲ以テ正當ナリトスル所以ノ者ハ他ナシ、帝國憲法ハ革命ノ憲法ニ非ス、舊來繼續セル天皇ノ大權ヨリ出テタルモノナリ、而シテ其ノ條規ハ唯タ將來ニ向テ統治權ノ施行ヲ制限セントスルノミ、敢テ既往ニ於ケル正當公權施行ノ結果タル現行ノ法令ニマテモ變更ヲ及ホスノ意ニ非サルニ因ル。既往ニ於テハ立法ノ全權天皇及天皇ノ政府ニ在リタリ、而シテ現行ノ法令ハ此ノ全權ノ結果ナリ、而シテ憲法ハ此ノ大權ヲ撲滅シテ新ニ立法權ヲ設ケタルニ非ス、唯タ將來ニ於テ一定ノ場合ニハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ必要トシタルノミナリ、是ヲ以テ既往法令ノ全部ハ依然効力ヲ有シ、唯タ其ノ中ニ就テ憲法七十六條ノ或ル一條又ハ一項ニ違反スル正面ノ條項ノ

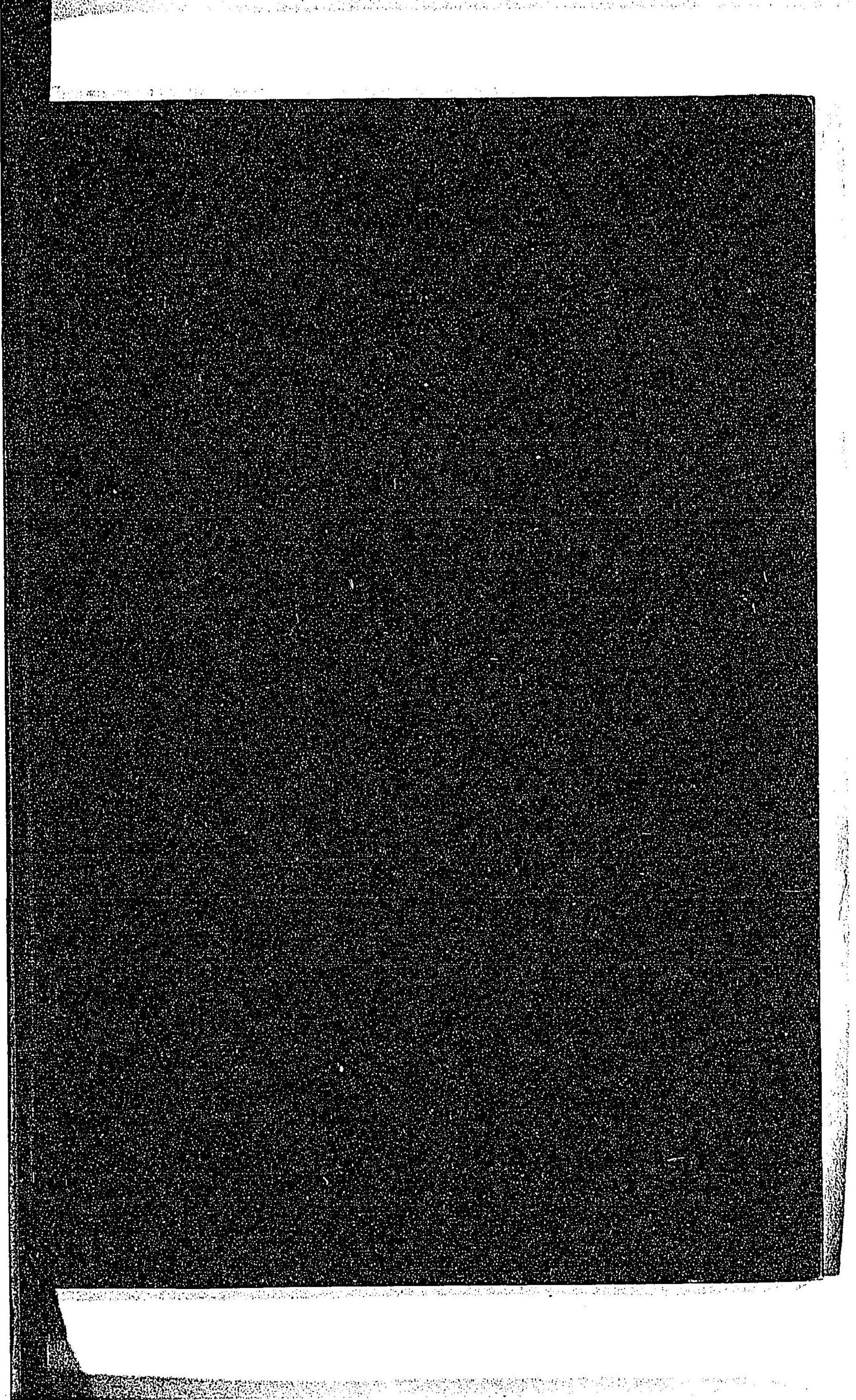
ミ無効ニ歸スルナリ。

今事實ニ涉リテ之ヲ稽查スルニ、實際本條ニ依リ始メテ効力ヲ失フニ至レル法令ハ殆ト一モ無シ、是レ本邦立憲ノ制ノ漸ヲ以テ進ミ今日アルニ至レルニ因ル。

○**理由**ハ効力ヲ有スト云フニ就キテハ法律トシテ効力ヲ有スルヤ將タ命令トシテ効力ヲ有スルヤヲ究定セサル可カラス。既往ノ法令ハ帝國議會ノ協賛ヲ經タルニ非サレハ仮令法律ノ名ヲ以テ發布セラレタルモノアリトモ是レ憲法ニ謂フ所ノ法律ニ非ス、憲法上ノ法律ニ對シテ言ヘハ皆是レ命令ナリ。彼ノ刑法ノ如キモ名ハ法律ナレト其ノ實ハ命令ナリ、何トナレハ議會ハ之レニ協賛シタルニ非サレハナリ。然ルニ憲法ニ依レハ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得サルモ命令ハ命令ヲ以テ變更スルコトヲ得ヘキ所ナリ。是ニ於テ既往ノ法令ハ

何ニ依ラス命令ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得ヘキヤ否ヤト云コト一ノ問題ト爲レリ。此ノ問題ノ解釋ニ曰、其ノ實ハ皆命令ナルモ實法ニ於テ法律タルコトヲ要スル事件ニ關スルモノハ將來法律ヲ以テスルニ非サレハ變更シ難シ之ニ反シテ憲法ニ於テ法律タラシコトヲ要スル事件ニ關係ナキモノハ假令憲法有効ノ前ニ於テ一旦法律トシテ制定シタル所ノモノモ法理上命令ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得ヘシ、唯タ政略上ヨリ然セサルヲ宜シトスト云フノミト。

14
247



14

247

031747-000-3

14-247

帝国憲法講義

有賀 長雄/述

M22?

BBE-0374



36.3.22